



始



PREPARATION AND DELIVERY
OF SERMONS

BY
JOSEPH A. BROADUS, D.D., LL.D.

۳۲۵

۳۵۳

A TREATISE ON THE PREPARATION AND DELIVERY
 OF SERMONS
 BY JOHN A. BROADUS, D.D., LL.D.



325

353

說
 教
 學

神學博士ジョン・エイ・ブロードス著
 神學博士千葉勇五郎譯

日本基督教興文協會



大正
 4. 4. 28
 内交



此書は、日本基督教興文協會より發行するものなり。而して本協會の事業は下文に定むる如し。

『日本基督教興文協會の事業は、日本の基督教信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及び弘布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッシヨンの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。』

はしがき

本書の原著は説教學の教科書又は参考書として、過去四十年間、英米兩國を始とし、諸他の地方に於ける各派神學校、並に基督教の説教に従事する人々の間に最も廣く用ゐられた書である。英國に於て出版されたものは別として、米國のみにも既に版を重ねること三十に及んで居る。著者ジョン・エー・ブロードス博士は永らく米國サウザルン・バプテスト神學校の校長として説教學を教へた人なると共に、米國南部に於ける有数の説教者であつた。故に本書の内容は机上の空論に非ずして一々實際より演繹された原理である。従つて其説く所は單に乾燥無味なる抽象論の骸骨ではなく、活きた福音を活きた人々に活用するに最も必要なる血と肉とを具備するものである。本書が世に普く認めらるゝに至つた主なる所以も亦實に茲に存すると思ふ。

原著は題して「説教の準備と其演述法」と云ひ、二部より成つてゐ

る。前部は普通の説教學を論じ、後部は説教の演述法即ち雄辯術を述べてある。今茲に譯したのは前者である。譯文は一言一句の原文に忠ならんよりも、原意に忠ならんことを努めた。殊に國情の異なるに従ひ、多少の斟酌と省略とを施した所も尠なくない、讀者之を諒せられよ。

本書を公にするに當り殊に記して翻譯の許諾を與へられたるチャロット・エー・ブローダス女史の好意並に關西學院教授佐藤清君の援助に對し謹んで感謝の意を表明する次第である。

大正四年四月

譯者 識す

苟も説教學の著を企つるものにして何人が其責任を感ぜざるもの、深く感ぜざるものがあらう。福音を宣傳するは重大な事である。されば説教を能する方法に關して教を爲し又注意を與へんとするは實に重大な事である。 著者

目次

序論

一、説教の大切にして且困難なること	一
二、雄辯の性質	七
三、有力なる説教に缺くべからざる要件	一三
四、修辭學的諸規則の起源	二〇
五、修辭學研究の危険	二二
六、説教學と修辭學との關係	二九
七、説教學の研究	三二

第一編

説教の材料

第一章 題詞——選擇

- 一、語義……………三五
- 二、題詞を設ける利益……………三九
- 三、題詞選擇の規則……………四四

第二章 題詞——解釋

- 一、周到なる注意を以て正確に解釋すべきこと……………五九
- 二、題詞解釋上誤謬を生ずる主因……………六九
- 三、屢々誤用さるゝ題詞の實例……………九八
- 四、題詞研究に關する注意……………一二

第三章 説教の題——分類

- 一、教理的の題……………一二九
- 二、道德的の題……………一四一
- 三、歴史的の題……………一四八
- 四、經驗的の題……………一五四

第四章 特別な場合の説教

- 一、葬式説教……………一六一
- 二、學校又は記念會などに於ける説教……………一六六
- 三、特別傳道説教……………一六九
- 四、子供に對する説教……………一七五

五、其他の人々に對する説教……………一八七

第五章 説教一般材料

- 一、工夫……………一九二
- 二、材料の集聚……………一九六
- 三、創作……………二一一
- 四、剽竊と摸倣……………二二七
- 五、斬新……………二四二
- 六、奇矯なる説教……………二四九

第六章 特殊材料

一、説明……………二五四

- 二、題詞の説明……………二五八
- 三、題目の説明……………二七二

第七章 特殊材料——例

- 一、例の諸用途……………二八三
- 二、例の出所……………二九〇
- 三、引例に關する注意……………三一三

第八章 特殊材料——應用……………三一七

第一編

説教の排列

第一章 排列の必要……………三四五

第二章 説教の部分

一、冒頭……………三五八

二、本論……………三七七

三、結尾……………四一三

第三章 説教の種類

一、題目的説教……………四三一

二、題詞的説教……………四三五

三、解釋的説教……………四四七

第三編

體裁

第一章 體裁總論

一、體裁の性質及び其大切なること……………四七七

二、體裁改良の途……………四八八

第二章 體裁の要素——明白……………五〇八

第三章 體裁の勢力……………五三五

第四章 體裁の優美……………五七一

第五章 説教に想像の大切なること

一、辯説家に想像の必要なること……………五九四

二、想像力養成の方法……………六〇三

説教學



序論

- 一、説教の大切にして且困難なること
- 二、雄辯の性質
- 三、有力なる説教に缺くべからざる要件
- 四、修辭學的諸規則の起源
- 五、修辭學研究の危険
- 六、説教學と修辭學との關係
- 七、説教學の研究

ジョン・エー・ブローダス 著
千葉 勇五 郎 譯

第一節 説教の大切にして且困難なること

基督の福音を宣傳するために、神の選ひ給ひし有力なる方法は何か

といはゞ、それは勿論説教である。個人に對して語ると、聽衆に對して語るとに拘はらず、説教の地位を奪ふものは他にない。印刷物は近來善惡何れの目的の爲にも用ゐらるゝ一大勢力となつたが、我等は眞理擴張のために、大いなる注意と種々なる方法とによりて、之を利用しなければならぬ。さうして印刷物は到底生命ある説教の地位を顛覆することは出来ないのである。説教者を救ひし眞理は、やがて世の萬民をも救ひ得る眞理なることを信じ、之れによりて勵まされ、激せられ、熱情に溢れて同胞の前に立ち、顔と顔眼と眼とを合せて語る時に、聽衆と説教者との間には、電光の如く感應する同情が起り、遂に人々を益々高きに導き、高き思想、深き感情を起さしめ、人々を彌高きに進めて、天上に登らしむるならば、説教が人を動かす力と、人の品格、生命、及び生涯に及ぼす感化とは、到底印刷物の企及する所ではない。訪問は極めて大切

なことである。説教者は勉めて之を爲さなければならぬが、之れとても説教の地位を奪ふことは出来ないのみならず、之によりて力なき講壇の働きを補ふわけにはゆかぬ。此二つのものは互に相俟ち助けあつて行はるべきもので、然らざる場合には、何方も最大最良の結果を收めることは出来ないのである。同情ある牧師として、信用ある相談相手として、又老幼貧富の友として尊敬されてゐる人が、一たび起つて説教するならば、神の眞理は其人の唇によりて、更に力あるものとなるのみならず、其人の有つてゐる同情といふ魔力によりて人々の頑なる心の戸は直ちに開かれ、容易に其言葉を受け入れることが出来る。又こゝに偉大なる説教者があつて、能く聖書に通じ、高尚なる思想を抱き、力と熱心に燃えてゐる説教を爲して人々に確信を與へ、聽衆の心を動かしておのれと同心一体ならしめ、又神の言葉は其人の唇より之を聞

けば、無限の權威あるを感じ、人心に森嚴なる感興を呼び起すやうな人が、惱めるもの、悲めるもの、誘惑せらるゝもの、家を訪問するならば、その訪問は一種いふべからざる意味と、力を有することは、想像するに難いことではない。若し牧師たるものが、この中の一方に特別に優れてをると思はば、他の一方をも怠らぬやうに勉めなければならぬ。

宗教上の儀式は、教訓と感動とを與へるものである。我々が兒童を教育するには繪に書いたものを用ゐる様に、舊約時代にありては儀式を用ゐたのである。基督教は本來儀式に重きを置いてゐない。しかも尙深遠なる意義を含める二個の聖禮を有するのは、儀式の大切なることを表現はすものである。又これによりて屢深き宗教上の印象を與へるのである。たゞ是等の儀式は、つまり神の靈能の助けによりて行はるゝ力ある説教が、當然盡すべき任務たる、人々を教へ、勧め、信せし

め、従はしむることの一助となるに過ぎぬ。或はたゞ是等のことを解し易く説明するための繪畫に外ならぬ。

されば説教は、常に必要缺くべからざるものである。良き説教は偉大なる力を有つてゐるものである。バプテスマのヨハネがユダヤの曠野に叫んで、幾萬の群衆を引き寄せた時より今日に至るまで、苟も宗教的大運動といはれ、聖書の中に輝いてをる眞理の復興といはれ、宗教心の復活といはれたもので、説教が其原因となり、或は其結果とならぬことはなかつた。

然るに茲に歎はしきことがある。それは良き説教をなすことの極めて困難なることである。全世界を通じて、毎週行はるゝ説教のうち、眞に善良なるものは、果して如何程あるだらうか。操觚者などは、新聞雑誌の上で、時々説教を批難するが、彼等は何時も文學上の最良の模範

的作物と、平凡なる説教とを、殊更に比較して判断するが故に、其云ふところは不親切にして且不正當である。加之文學上美術上の批判には、同情を加へて其批判の上に多少の斟酌をせねばならぬ。然るに此場合には全くそれが缺けてゐる。我々のやうに説教することを好み、且更に善良なる説教をなさんことを常に希ふものは、何人よりも、自己の缺點と、説教の困難とを自覺せざるを得ない。我々の尊敬する有力なる一牧師が、長椅子から起き上りながら、或日かう云ふたことがある。『さて自分は之れから今晚の説教の準備をしなければならぬが、自分は固より説教といふ説教をすることは出来ぬ。又是迄とても左様云ふ説教をしたことはない。又眞實ほんとうに説教といふ説教を聞いたこともなく』云。

さりながら、このやうに、尊むべき事業、人心を牽きつける事業である

から、これに伴ふ困難と責任も亦従つて大であるが、愉快なことも亦比ひなく愉快である。故に我々はこの事業の最高の理想を望んで進まなければならぬ。シセロが青年辯士に對して云へる語は、又移して説教にも適用することが出来やう。即ち「予は諸君の勉めて止まざらんことを勸むるのみにあらず。寧ろ之を歎願せん」と。

第二節 雄辯の性質

善良なる説教とは如何なるものを云ふ乎。更に廣い言葉でいへば、雄辯とは果して如何なる事を云ふ乎。雄辯とは單に思索をいふのではない。冥想をいふのでもない。雄辯が我々の實際の努力に影響することの大いなるは、人の想像以上である一事に依りても是は明かである。この問題に就て、多くの議論を是非する事は暫く之を他日に譲り、次に雄辯の性質について少しく考へて見やう。——夫れ雄辯は單に

人の判断力に明確なる答を與へ、想像力を燃し、感情を動かすばかりではなく、人々の意志に激動を與へるやうに語ることである。人々の智識と想像と感情とを動かすことは、いづれも雄辯に必要な要素であるが、其内最も大切なことは意志を動かすことである。雄辯の力を借りなくとも、教訓を與ふることは出来る。又納得させることも出来る。詩歌小説などは、雄辯を用ゐずして、人々の想像力を煽揚することが出来る。哀れな物語や、腸を断つやうな悲い文章によりて、感情を深く動かすことも出来る。しかし之れに伴うて、目的通りの行爲を促すことが出来なければ、それは雄辯とは云はぬ。『雄辯とはおのが論旨を貫徹するやうに話すことである』といふ人もあるが、雄辯の性質を嚴格に詮じつむれば、これは正しい解釋といふことは出来ぬ。聴衆の心の中に、頑冥なる僻見不可拔の障害となるものが存在してをる場合に

は、説教者は如何な雄辯を振うとも、人々を悔改めさせることは出来ないのである。雄辯は意志に激動を與へるものでなければならぬ。説教者の辯舌によりて、聴衆の心は打碎かれ、震蕩せられ、動搖せられて、或種の行爲をなし、若くは爲さんとする決心を促がすものでなければならぬ。人々に確信を與へ、想像力を燃し、感情を動かして、善良なる結果を意志に起させるもの、是れ正しく雄辯と云ふべきものである。オーステンはかく云うてをる。『辯舌は眞理を明かにし、面白く且感動を與ふるやうにせよ』と。されば雄辯は實際的のものである。眞なる結果、實際的の結果を得んがために行ふのでなければ、雄辯も亦無益である。有名なる愛蘭土の法律家ダニエル・オーコンネル氏はかく云ふたと傳へられてゐる。『良い演説はうれしいものである。しかし人々の決心を促がすものでなければ、駄目である』と。たゞに華麗な雄辯は、良

い演説であるかも知れぬが、人心の根柢を打つことは出来ぬ。説教者が單に人を喜ばしめんために、聽衆の想像力を燃したり、又多大の感動を興へんためにのみ聽衆の感情を動かしたりするのは、雄辯といふことは出来ぬ。しかるに世の中には是に類する説教が甚だ多い。たゞ人々を喜ばせることをのみ目的とする似而非説教者は暫く措き、善良なる説教者でありながら、花やかな辯舌を以て人々を感服させるやうな人でありながら、何故聽衆はこのやうに感ずるか、又自分は如何なる目的のために人々の感情を動かしてゐるか、と云ふやうなことを、考へない人々が多い。當今新聞紙上から誇大の賞讃を受けてゐる説教者、或は教會の歸途、一知半解の書生などが、あれは雄辯であるなど、評するところのもの、多くは空虚にして三文の値もなきものである。

雄辯は極めて重大な事である。あの人の談論は雄辯で極めて面白

い、又は其談論の一節が雄辯で且面白いと云ふ事は出来ぬ。雄辯といふ名稱を冠するに足るものは、道德的熱心を持たなければならぬ。多少の滑稽諧謔を用ゐるのは差支ないが、この場合には、その説教を一貫する嚴肅と熱心に比して、第二位に屬するものでなければならぬ。偶發的のものでなければならぬ。セレメン氏は有名なる一小著「雄辯は徳なり」といふ書物のうちに、「雄辯は倫理學に屬し、演説者の品格と精神とは重要な要素をなしてゐる」と云ふて居る。此説は少々誇張に過ぐる點もあるが、クエンテリアンの云ふたやうに、真理の大切なる一要素を含んでゐる。

ウキネット氏はかく云ふてをる。「雄辯の本領は、平々凡々の所に存す。雄辯が高尙なる哲學上の考察と結合せらるゝ事、尙當今の諸大家に於けるが如きものを見て、吾人は匆卒にも、雄辯より受くる印象を哲

學に歸せんとするは、免かるべからざる所なれども、是れ一種の誘惑と云はざるべからず。然りといへども雄辯とは斯の如く高尚なるものゝみを云ふにあらず。寧ろ通常のことをいふなり。即ち雄辯とは、人々の靈魂に潜む琴線を打ちて、吾人の心中に振動せしむるの力は是れなり。——吾人が演説者として承認するものは、實にこの種に屬するものにして、他にあらざるなり。』と。苟も或問題について雄辯を振はんとせば、母、兒童、朋友、家庭、國家、天國、其他之に類する觀念と其問題とを聯想させなければ、出來ないことである。即ち是等のことは、何れも有りふれた事で、平凡の極である。演説者の努力すべき點は、演説の骨組や例證などにより、又はおのれの心そのものを打ち出す激烈な感情などにより、以上に掲げたやうな日常普通の觀念に、新しい趣味を與へ、聽衆の心の中に新しい力を恢復することである。全く新しい材料を捕へて

演説する人は、獨創であると云ふ信用を博することが出来る。随つて又充分な賞讃を得ることが出来る。しかし斯の如き人は、雄辯に必要な活ける力を働かすことは出來ぬ。故に説教者にして眞に雄辯たらんとせば、人々の熟知する福音の活きたる眞理を話さなければならぬ。單に修辭學上より見るも、説教者は當然福音を宣傳すべきである。即ち古き眞理を固く守り、新しき興味と力を以て、この古き眞理を飾らんがために、努力すべきである。

第三節 有力なる説教に缺くべからざる要件

有力なる説教に缺くべからざる要件は、敬虔、天賦の才能、智識、熟練の四つである。

一、敬虔 敬虔を缺いてゐる人でも、説教をして、時には好結果を擧げることがあるが、是は神が悪によりて善を收めたまふ驚くべき方法の

一つである。しかし是れは殆んど例外である。通常力ある説教の第一の要件は、説教者の熱心なる敬虔の心である。説教者は敬虔の念燃ゆるが如きものがあるが故に、聴衆は皆その熱情に動かさるゝのである。屢、冷淡氷のやうな無頓着の人々の間にゐながら、尙その熱情を高むることが出来るのである。この敬虔の念あればこそ、聴衆の好意も同情をも得ることが出来るのである。無信仰なものも、説教者の敬虔に富める熱心に感じ、且つ尊敬の意をあらはすに至るのである。加之神はこの敬虔より發する働きの上に、祝福を垂れたまふことを約束してゐる。敬虔の念は説教に最も重大なる關係を有することを知らないために、種々の誤つた考へや、悪い習慣が、説教者の間に起つて來たのである。修辭學上より見るも、又更に高尚なる觀察點より考ふるも、説教に缺くべからざる要件は、先づ個人的敬虔といふものを養はなければならぬと云ふことである。而して之を怠るのは、所謂不良なる修辭學である。

二、天賦の才能 説教者に必要なものは、明晰なる思考力、強き感情、活潑なる想像、及び是等を發表する能力と、力ある話振りなどである。是等は最高の實力を發揮するに、暫くも缺くべからざるものである。而して皆殆ど無限に發達させることが出来る。故に右の内何れを缺いてゐると思ふ人があつても、それを發達させることは出来るが、しかしそれは天賦の才能として既に幾分か自分に持てをるものでなければならぬ。

三、智識 宗教的眞理に關する智識、及び宗教的眞理を闡明する光となるべき事物に關する智識を有する事が大切である。又宗教的眞理に關係して人情を知ること必要である。又我々の周圍にある人情

を有の儘に知ることが大切である。辯説家は一切の事物を知らなければならぬと云ふのは、シセロが常に抱いてゐた考へであつた。凡そ智識と名のつくもので、説教者の役に立たぬものは一つも無い。極めて貧少の素養を有てをる人でも、尙人々に利益を與へてをるといふ事實は我々の感謝して承認せねばならぬところである。けれども自分は聴衆の最大多数よりも智識が勝つて居ると考へて、それで満足するやうなのは、最も低い理想に住する人と云はなければならぬ。苟も説教者たるものは、終生の祈禱と努力とを以て、學び得るだけは學ばねばならぬといふ皓潔なる大望心を常に持つべきである。敬虔の念は説教の原動力である。天賦の才能に及ぶ限りの修養を加へれば、説教の手段方法が出来る。そして智識は是等のものを潤澤する材料を供給する。尙之れに加ふるに次のものを以てせねばならぬ。

四 熟練 この事は單に體裁又は演述法にのみ限つて云ふのではない。材料の蒐集、取捨、配列に就いて云ふのである。有名な説教者は残らず（此事は普通一般の演説家に取ても變ることはないが）何れも熟達せる説教を爲さんために、非常に努力したものである。ヘンリー・クレイ氏は後年アルバニーの法學校の學生に演説した時、彼れの若い頃は、ケンタッキー州にゐたのであるが、その際彼れの實行した事を述べてゐる。その言葉に、氏は「歴史或は科學書を日々に通讀し、且數年間是等のことに就いて語ることを續けた。又即席的の事を、時としては野外に於て、時としては森林の中に於て、或は少し隔つてゐる穀物倉の中で、牛馬を聴衆として語つた」といふてをる。

又我々は亞米利加印度種族の多くの雄辯家は、澄み渡れる池水を鏡として、其傍に立つて辯舌を練つたと聞えてをる。生れながらの雄辯

家として最も著き適例を示してゐるパトリック・ヘンリーは、果して如何なる訓練を積んだであらうか。彼は狭苦しい店に坐つて、日々人々と接觸し、そこに人情の機微をさぐつた。多くの來客と縦横に話を交えて、自分の言葉を豊富にした。彼れは又一方には熱心なる歴史研究者であつた。レビーの演説を忍耐して不斷に講究し、之を精密に翻譯して、比類なきものとなした。浸禮教會又は美以教會等に席を有する尊むべき説教者の中、初は殆ど教育のない人々であつたにも拘らず、しかも多くの修養を積んだ結果、彼等の天職則ち説教者としては、最高卓抜の地位に達した人々が多い。彼等の明晰正確なる發表法、人を牽き著ける力ある演説振りなどは、決して一朝一夕に穫たものではない。常に銳利なる批評的の注意を怠らなかつた結果である。又長年月の間熱心に其練習を繼續した努力の結果である。彼等が流暢自在なる

會話は、以上の事實を充分に證據立てゝをることを、我々親しく交際する光榮を得たものは知つて居る。熟練したる話と不熟練なる話とに差のあるのは、例へば大工或は鍛冶が、道具を使用するに巧拙あるが如きものである。練習せずして眞の熟練に達することは出来ぬ。しかし練習ばかりしたからとて、それが最高の熟練ある説教といふことは出来ぬ。用意周到なる練習、即ち人間を精密に觀察し、自己を深く注意し、之を總括するに、常識と高尚なる趣味とを以てするものでなければ、之を最高の熟練といふことは出来ないのである。

熟練の點からいへば、説教は一種の藝術である。藝術は心身に缺くべからざる諸能力を創造することは出来ない。又是等のもの、全く缺乏してをる時に、之を供給することも出来ない。しかし藝術は既存のものを發達せしめ、進歩せしめ、又最も有効に使用せしめ得るもので

ある。されば熟練即ち辯舌の組立並びに演述法に熟達することは、修辭學の目的である。

第四節 修辭學的諸規則の起源

一、修辭學の規則は本來歸納法の結果である。是等の規則は、凡そ人は如何に話すべき筈のものであるかと云ふ事を、一般的原理を以て示さんために、自稱學者の定めたものであらうと思ふ人々もあるが、もとは是等の規則は、單に巧妙に話す人々の話具合を觀察して得たる結果に過ぎないものである。何人も時には修辭學上の規則から離れなければならぬ場合に遭遇することもあるだらう。されど忘れてならぬことは、かゝる時に修辭學の規則を無視するのは、人工的束縛や障礙を大膽に踏み倒すわけではなくて、唯暫くの間、相應の理由に基づき、通常の道筋を外れたに過ぎぬ。且かくの如き行動をとるのは、其必要に應じ

てをるか又はそれが能く處理されてあるか否かによりて、是ともなり、非ともなるのである。優れたる人は、修辭學上の規則については、何等の智識をも有つてゐなくとも、屢々その規則に適合することがある。此種の人々は、優秀なる人々が話すやうに話してをると云ふに外ならぬのである。

二、我々が規則と呼ぶ所のものは、原理を都合よく發表したものに過ぎない。規則とは原理を容易に記憶せしめ、又直様適用せしむるやうに、簡潔な形にしたものである。しかし規則は如何に巧妙に作られても、其規則の根本となる原理が、伸縮自在であるやうには行かぬ。されば規則を破つても、尙原理に適合してをると云ふ場合もあるだらう。即ち規則は自由に枉げることには出来ないが、原理は之を伸縮せしめて、特殊の状態に順應せしむることの出来る場合がある。かく考へ來れ

ば、辯士が修辭學上の規則を全く破つても、尙屢偉大なる効果を奏することある所以を悟ることが出来やう。普通の道筋を離るゝがため、人の心に奇異の感を起させることがある。之は水車場に睡眠してをる番人が、水車の止まつたのに驚いて、眼を醒ますと同一である。説明することが出来る。更に他の場合にありては、殊に規則を破るにも拘らず、他の點に於て優る所があるから、有効なる結果を生ずるのである。

第五節 修辭學研究の危険

一、實質よりも形式を尊ぶの弊。修辭學は材料の使用、選擇、順應、配列、發表などのことに關するものであるが、畢竟其うち最も大切なものは材料である。デモスセネスが次のやうなことを云つた時にも、彼れは敢て材料の大切なることを否定したわけでは無論なかつた。彼れの言葉として世に傳へらるゝ所のものは次の語である。「辯説に第一

のもの、第二のもの、第三のものは演述法である」と。彼れは演述法以外の要素の大切なことは、無論であると云ふ風に考へたのである。おのが語らんとする問題に就いて、周匝なる研究をなす點に於ては、デモスセネスを凌ぐものはないだらう。演述は彼れにとりては、殊に困難なることであつた。初彼れは演述に拙劣であつたため、青年時代の企圖を悉く放擲するに至つたのである。彼れが後年に於ける上達は、非常なる努力によつたものであるから、演述法に重きを置いたのも、無理はないのである。勿論この場合といへども、おのが語らんとする問題に關して、充分なる智識を持たなければならぬと云ふことを看過するものではない。さて説教者の最も注意すべきことは、敬虔と、智識と、神の恵みとである。熟練は尊むべきものであるけれども、以上のものに比すれば、更に下位に屬するものである。然るに修辭學上の研究は、人

々をして以上の眞理を忘れしむる危険がある。説教者が説教を批評する時、人々が談笑の間に説教を批評する時、又は新聞紙上で説教を批評する時、よく見る所であるが、徒らに辯説の如何や、辯士の彼れ是れなごをばかり批評する傾向のあるのは、悲むべきことである。故に同情のない讀者又は聽衆は、かういふ場合に、説教者の骨折つてをるのは、熟練を示さんためである、雄辯家といふ名譽を博せんがためであると結論するのは、強ち理由のないことではないのである。

二、摸倣。有意的に摸倣する事あり、又無意識に之をなすことあるは、何人も認むる所である。無意識の摸倣は左程咎むべきではないが、尙有害たるを免かれぬ。故に深く自らを省み、此惡弊に陥らざるやう勉めなければならぬ。摸倣をする人々は、通常特に人の缺點を真似る風がある。此理由は見易い。達者な辯説者の長所は均一してをるから、

目立たないが、缺點は飛び抜けて著しく見える。故に缺點の方が無意識の摸倣を招き易い所以である。然るに之を摸倣する人々は、有名な辯説者が力を有する秘訣は、外に現はれて目に見える所にあると誤解し、有意的に之を摸倣するのであるが、是等は實に淺薄な觀察と云はねばならぬ。是等の人々は、均齊に調和してをる辯説者の諸長所を顧みずして、徒らに著しき缺點を摸倣してをるのである。

學校は摸倣の弊害を助長せしむる所であらうか、そうではない。容易く此弊に陥るが如き者は、何處にゐても何人をか摸倣せねば止まぬものである。何れの地方に於ても、人氣ある説教者は、四圍の人々の真似る所となる。然るに是等の多數の摸倣者が一校に集まると、その摸倣する手本の數は少なくなり、又更により手本を見ることゝなるのであるから、彼等が其手本に向つて注意することも益々深くなるのであ

る。之れと同時に摸倣の弊害を指摘する機會も多くあるから、有意的摸倣を避けるは勿論、一度氣が付いた上は、無意識の摸倣をも速かに矯正するやうになる。神學校に於ては、大學及その學校に於けるよりも、摸倣が盛んであると云ふのではないが、多くの人々はこの缺點に陥り易い。數ヶ月の間、毎週數回、同一辯說者の辯說を聞くに當りては、何人も其人の他人と異なる點を摸倣せざるやう、注意せねばならぬ。

三、人工的なること。人工的といふうちにも、巧言令色といふ汚名を附する程の者ではないものもある。かういふ辯說者の動機は正しいのであるが、判斷と趣味に缺けてをる。されど是又一大缺點たることを免れぬ。すべて如何なる辯說でもそうであるが、殊に説教に於ては、多少無器用であつても、自然のままなること、飾なきことが大切である。人工的に美はしからんよりも、最も高尚なる目的を達するには、此方が

却て有効である。人或は云はん、「藝術を隠蔽するものは最高の藝術である」と。しかし吾人は否と答へざるを得ぬ。夫れ如何なる藝術も藝術を隠す事は出来ぬ。我々はそれを明かに知覺することが出来ないかも知れないが、微かながらも、本能的に一種異様の感を挾み、其原因果していづこにあるかを怪むに至るであらう。兎に角あまり技巧に走ることは、説教者の善意に出でたる努力なるにせよ、其最終の目的を達することは出来ぬ。人工的な辯說の弊害は、甚だ大いなるものである。不慣れた人の乗馬に於けるが如きものであつて、恰も馬上に於ても猶心を靜安にすることを習ふ必要あるが如く、辯說者が新しい境遇に立ち、新しい聽衆の前に立つて、心や、新奇と不自然とを感ずる時であつても、猶自然のままに語ることを學ばねばならぬ。故意の動作を悉く捨て去るは云ふに及ばず、無意識的の不自然も亦注意して避けね

ばならぬ。人のために計らんとする清き希望に満されて自己を忘るゝは、自然に達する最良の方法である。是に由りて之を觀れば、説教者はたゞ練習のために説教をしてはならぬ。如何となれば、是は必然人工的に陥る事を奨励するからである。少くとも青年時代には、真正誠實なる説教をなすことに努力せねばならぬ。(青年時代には左程思はんことでも、其人の生涯の全課程に偉大なる影響を與ふること青年時代の努力のごとき者は無い)假令學生が同窓の友の前に、或は教師の前に立て説教する時でも、其問題は宗教上必要なる者を捕へなければならぬ。聽衆のためを計り、熱心なる祈禱に充たされてゐねばならぬ。

説教殊に演述法に關して、修辭學上より學ぶべきところは、主に消極的のものである。最初から立派な標準を立て、之に従はんと勉めるのはよろしくない。こゝに松の樹よりも杉の樹は美なりといふ考へ

を抱いてをる人があるとする。そして其人が松の樹を杉の樹の形に刈り込み、又色も杉の色に染めるならば、其結果は眞に笑ふべきものであらう。杉の樹は宜しく杉の樹、松の樹は宜しく松の樹たるべきものである。たゞ勉むべきは、其種類に従て最良の樹とならしめんがために、其成長を助け、缺を入れて仕上げることである。辯説に關しても、正に之と同じで、常に自我たり、眞我たり、自然我たれよ。たゞ本來進歩し得べき最良の點まで發達し、矯正し、上達したる自我たらしめよ。

第六節 説教學と修辭學との關係

希臘の説教(Homilia)といふ語は、會話、對話、又は平易なる話といふ意味である。拉典語の説教(Sermo)といふ語は又同じく、會話、談話、辯説といふ意義を有つてをる。初代の基督教徒は、公の場所に於て人々を教へる事を指すに、デモスセネスやシセロ等の演説に名づけた言語を踏襲

せずして、話即ち解し、易き辯説と呼んだのは、我々の學ぶべき點である。其後之れが修辭學の感化をうけ、又基督教禮拜の一般に行はるゝに及んで、話は更に形式を有する長き辯説となつたのである。此時代にも尙『ホミリ』といふ語を用ゐてゐたが、其後に至り、説教は演説風になつて間々ロゴス即ち辯説と呼ばれた。此『ホミリ』といふ語から、ホミリテツクス(Homilies)説教學といふ語が起つた。基督教に關する辯説の學或は術、若くは説教の準備と演述に關する一切のことを包容する攻究を説教學といふやうになつたのである。ホッピン氏は、説教學に關して左の如き定義を下してをる。「説教學とは、演述に關する根本原理を、基督教禮拜の目的を以て集りたる定時集會に於て、神の真理の宣傳に應用することを教へる學問なり」と。フェルプス氏は曰く「説教學とは説教の性質、分類、分解及び體裁スタイルを論ずる學なり」と。説教學

は、修辭學の一部門、若くは修辭學に類する一個の術であると云ひ得べきものである。説教學及修辭學の根本原理はもと人性に其源を發するものである。二者本來同一のものであるから、説教學とは修辭學を特別なる種類の辯説に應用したるものと考ふべきものである。しかし説教が世間的の辯説と異なつてをるのは當然のことである。即ち材料の出所、話様の單刀直入的なること、簡潔なること、説教者が出世間的動機に動かされてゐなければならぬ點などは、他の辯説と著く異なる點である。

以上述べたる如く、説教學と修辭學との間には、種々の相異の點もあるが、説教學を修辭學から全く分離して攻究するには及ばない。しかし説教學を研究するもの並に實地説教に従事する人は、以上の特徴の存することを常に記憶しなければならぬ。

第七節 説教學の研究

神學を研究する學生にとりても、又牧會に従事する人々にとりても、説教學の極めて大切なことは明白である。本書の目的は、説教學を修めて益するところあらんとする人々の心得となるべきことを示さんとのするである。説教學に關する文書は、浩瀚にして又有益なる物も多い。直接に此問題に關係する有益なる書籍は、凡ての國語、凡ての時代に亘りて少くはない。又修辭學、雄辯學、其他之に類する問題を論ずる書籍も夥しく、説教者の熟讀に價するものも少なくはないのである。近年諸大學並に其他の學校に於ける國語研究の復興に伴ひ、修辭學に關する書は、彌々多きを加へた。是等の最近のものを始めとし、古代諸名家の名著を挙げ、來らば、修辭學上の根本的不變的原則を論じたるものは、數ふるに暇なき程あるのである。

加之説教學に關する文書は完備してをる。又これらの有益なる書籍は、あらゆる觀察點から説教學を論じてをる。我が米國に於ても、貴重にして有力なる著書は少くはない。何れも實際的價値を有するものとして、周到なる攻究を経たるものとして、普く知られてをるものもある。其外辯説並びに説教の歴史に關する書も多少はある。是等は皆説教學に必要なものであるが、其數に於ても、其價値に於ても、未だわれらの希望に満足を與ふるものはないのである。説教學の最も有力なる且普く知られてをる書を知らんとせば、後部に掲げてある參考書一覽表を見ればわかる。(原書を見よ)

説教に關する書籍の外に、説教學研究の主なる材料は左のものである。

一、他人の説教を聞くこと。但し靈性上益を受けんがために、友愛に

充ちたる同情と祈禱を以てなす願とを以て、しかも尙批評的注意を以て説教を聞くこと。

二、説教集の諸出版物。

三、説教者の傳記。これは、説教學に就いて一通りの智識を有する人に、無上の教訓を與ふることがある。

四、我々の説教に對する、教師及び其他識見ある聴衆の批評。

五、自らの缺點を注意して觀察すること。即ち實際の練習に當り、自己の缺點を發見せし後は、之を矯正せんがために、確固不拔の精神を以て之に當ること。

第一編 説教の材料

第一章

題詞—選擇

(一)語義 (二)題詞を設ける利益 (三)題詞選擇の規則

第一節 語義

題詞といふ言葉の原語テキスト(Text)は、ラテン語のテキセレ(texere)即ち「織る」といふ語より出たのである。其後比喩的に使はれて、輯めること、組立てることの意となり、更に作文(作話)即ち言葉や文字を連ねて思想を發表することの意味を有つに至つたのである。テキスタスといふ名詞は、織物、地合などいふことをあらはす語であるから慣例上、

此語は筆記したる思想、文章を指すやうになり、後には印刷したる思想、文章をも指すやうになつたのである。此習慣は或著者の續き物語或は論文などを讀む時に、それに説明的の註解を添へたり、又は著者の文章の傍や、或はその文章の下に註を入れたりすることから起つたのである。それで著者自身の作をテキストと呼ぶに至つたのである。則ち著者の連絡的文章と、出版者又は説明者の斷片的註解とを區別するために、斯く名づけたのである。テキストといふ語を、以上の義に使用する習慣が今日も尙残つてゐることは、古代の作者の原本を指して原文テキストと呼ぶによつても了解されるのである。そして原文批評テキストクリティシズムとは、元來の字句は果して如何なるものであつたかを確定する學問である。學校で使用する教科書を、テキストブック (text book) といふのも同じことである。則ち或著者の書を用ゐ、それに教師の説明若くは問答を加へ

て教へるからそう云ふのである。之と同じく、初代の説教に於ては、聖書中の一片の思想、即ち題詞に就き、解し易き簡略なる説明を加へる時に、説教者の説明若くは解釋と、聖書から抜き出した一つの思想をあらはす文句とを區別するために、その聖書の句を題詞テキストと呼んだのである。此説明的註解が整然たる辯説となり、又同時に解釋する聖書の字句を簡單にする習慣が生ずるやうになつてから、説教の基礎として選擇した聖書の言葉を指して、題詞と云ふやうになつたのである。

題詞といふ言葉の歴史を研究すれば、説教學といふ言葉を歴史的に研究する場合と等しく、本來、説教の解釋的であつた事がわかる。此事實は他の方面からも説明される。初代基督教の説教者は、可なり長い聖書の文句を取つて話したが、重に其文句の解釋に時を費した。しかし時には短句を捕へて語るのも有益であると考へた。そして漸次短

い題詞を選んで話すことが慣例となつた。十七世紀の頭、英國に於ては短句をとりて、數多の説教を作ることには屢あつたことである。ジョン・ハッは羅馬書八章の廿四節の一部分「我儕が救を得るは望によれり」といふ句を取りて、十四回の説教をした。又第一約翰書四章二十節を取りて、十七回の説教をした。約翰三章六節を取りて、十八回の説教をした。かくの如く同一句を取りて多くの説教をなした目的は、大問題に完全なる論究を與へ、總ての談論を悉く同一の題詞に關係せしめて、完全のものとなさんがためである。しかし此習慣は、人は自然變化を愛するものであると云ふ事實と相反してをる。寧ろ諸問題の關係を明かにして、一見一累系のものとなし、論ずる所の特種の問題、又は見解に應じ、説教毎に各異なりたる題詞をとりて論ずる方が有効である。是れ今日普通に行はるゝ慣習である。簡單なる一つの題詞を捕

へて一つ以上の説教をすることは稀である。且近來長い題詞を使用する舊慣に歸らんとする傾向もある。

第二節 題詞を設ける利益

題詞を設ける習慣は古き以前より始まりたるもので、今日となりては廣く行はれてをる。そして此習慣を棄つべき理由もないのである。若し殊更に此習慣を破るとせば、思慮あり、敬虔ある多くの聽衆の趣味を害し、却て彼等に苦痛を與へるだらうと思はれる。加之此習慣は良き理由に基いてをる。又著しき利益を有つてをる。

題詞を設けることは、明かに辯論に神聖なる感じを與へるのみならず、茲に更に大いなる真理がある。則ちそれは説教は、題詞の發達、其教訓の説明、例證、應用であると云ふ根本的觀念を與へることである。我々の務は神の言葉を教へることである。假令我々は時として、聖書中

與へ、其内容を多様にする。個々特別な題を設けて、特種 of 思想を發表する度合に應じて變化は生ずるのである。

題詞を用ゐることに關して通常持出さるゝ反對には、二三の原因があるのであるが、其中のどれか、屹度反對説の基礎をなしてをる。非常に杜撰な方法を以て題詞の解釋をすることが廣く世に行はれてゐるがために、或人々をして、題詞を使用することは、良いことでない、寧ろ不必要であると思はしむるに至つた。しかし濫用の點だけを見て、其必要をも併せて放擲せんとするは、予の首肯することの出来ない所である。聖書を尊敬するの念なく、又其豊富なる價值を了解せざる人々は、題詞を選ぶのは却て思想の自由と辯説の流暢とを束縛するものであると考へる。ヴォルテールはかう云ふてをる。『ホルグロウが從來講壇を汚し來りし没趣味の事物を矯正せし時に當り、彼れが題詞

を設けて説教するの習慣をも併せて矯正せざりしは遺憾なり。實に一二行の引照文に就て長々しい説教をなし、全体の辯説が此字句に束縛せられ終るとは何事ぞ。是れ殆ど何等の努力をも要せざる事にして、説教者の威嚴を傷つくるものと云ふべし。寧ろ題詞は辯論を出發せしむる標語若くは隱語たるべきなり』と。かゝる嘲弄的文字を弄する者は、牽強附會の説明をなして得意としてをるものである。又此種の批評家は、聖書を尊敬せず、又説教者と聖書との間に存する眞正の關係を知らぬことが主なる起因となつてをるのである。題詞を設けることに反對する第三の理由は、即ち之れである。或る敬虔にして有力なる説教者は、解釋的説教、題詞的説教を好まず、説教はいづれも一定の問題に關して哲學的の議論又は丹誠を凝したる辯論たるべきものと信じ、題詞を設ける習慣を以て不便なる束縛と考へる故だらう。ヱ

キネットの感も亦之より生じたるものらしい。

時としては、二個若しくは二個以上の題詞を選ぶことも、不適當とは云へない。例へば希伯來九〇二二『血を流すことあらざれば赦さるることあるなし』と、第一約翰一〇七『其子イエスキリストの血すべての罪よりわれらを清む』とを合せ、或は以賽亞六〇三『其榮光は全地に滿つ』と詩篇七二〇一九『全地は其榮光にて充つべし』とを結合することも出来る。スバルジョンは『我罪を犯せり』といふ句を聖書の七ヶ所から選んで、此言葉を發した人々の異なる事情、並に異なる精神上の有様に關して、面白い見方をしたことがある。

第三節 題詞選擇の規則

適當な題詞を選ぶ事は大切である。其選擇宜しきを得れば、説教準備に際しても、又之を述べる時にも、活氣あり、直ちに聽衆の注意を引く

ことが出来る。凡そ題詞選擇に於ける程、説教者の才能の多少、熟練の有無を示すものはない。又題詞選擇のことに成功して、熱心に一定の方針に従つて勉強するものには、豊かなる報酬を與へること、かくの如きものはないのである。牧師若しくは神學生は、聖書を読み、神學書を讀み、説教集、傳記、新聞雜誌をよむ時、或は機に觸れて思考する時、又は説教を準備する時、そういふ時には、屹度説教を作るに適當であると思はれる聖句が心中に浮ぶものであるから、常に題詞記載のために手帳を携帯してゐて、それを直ちに記載して置くがよからう。最初は之を實行するに、多少の困難を感じるのであるが、勉めて之を行ふならば、遂に習慣となつて左程の困難を感じなくなる。聖句を記載すると同時に、簡單なりとも、説教の梗概、又は殊に有益な見解、例證など、つまり單に題だ詞けを見て、再び思ひ出すことが出来ないと思ふ事柄を書き付けて

おくべきである。かうして書き留めておかないならば、後日、何故この聖句を選んだのかと自ら怪むやうになるだらう。是れ聯想の端を失ひ、着眼點を消失するからである。心意は常に同等の程度に於て活動するものではない。極めて創作の力に富む時がある。此機を利用すれば、説教の組立、適切なる題詞、問題などは、讀書、考察、戸々の訪問などをやる時に、續々と浮び來るものである。是等の良い種子は意を用ゐて培養し、發達の徑路を指摘しおくべきである。又時としては、冷淡で活氣なく、何等の思想をも考へ出すことの出來ないこともある。かういふ時に若し豫て用意してある或思想に觸れるならば、電光石火の如く幾多の思想は一時に燃え立つものである。精神活動の神速なる時に發見したる夥多の良題詞、好思想は、是を簡單に記載し置くか、又は他の事と心中に聯想せしむるやうに計らなければ、折角の良いものも、永久

に失くしてしまふやうになる。

題詞選擇の一助として、次の規則を擧ぐ。

(一) 題詞を曖昧にしてはならぬ。題詞は通例意味の明瞭なものでなければならぬ。然らざれば、人々は其意を解せざるが故に、自ら嫌惡の情を起すか、又はあんな題詞につきて、説教者は何事を語るのだらうと、好奇心を起させるのみであらう。しかしこゝに例外もある。即ち若し説教者が、不明瞭な聖句をとり、之を説明して、大切なる真理を教へることが出來ると信するならば、そつういふ題詞を選んでも宜い。しかし此場合には、其聖句を果して有益に又教訓的に説明することが出來るか否かといふことに深く注意しなければならぬ。單に説明せんがためのみに説明するのは説教者の時間を空しく費すことである。説教者の本務は、教理若くは實行に關して、眞に有益

なる教訓を人に與ふることであると云ふことを忘れてはならぬ。

(二) 壯嚴なる言語であつて、之を説明するに非常な努力を要するやうな題詞を用ゐるときには充分注意しなければならぬ。劈頭第一に非常な期待を聴衆に與へておくならば、人々を終りまで満足せしむることは甚だ困難である。さればとて、何人もかういふ題詞を用ゐるべからずと云ふ人はないだらう。聖書中最も高尚にして、最も力ある多くの句は、自然壯嚴なる言語から成つてをるものであるから、是等の句を避けて用ゐないのは、大いなる損失であると云はねばならぬ。時としては、同一の問題のために却て單純な題詞をとり、説教の途中に壯嚴な句を引用する方が都合のいゝこともあるだらう。しかし壯嚴な句を題詞として選んだ場合には、最初に豫防線を張り、大袈裟でなく、謙遜して、望まぬ結果を豫め避けるやうにする

がよろしい。則ち次のやうなことをいへば良いだらう。「我々は此偉大なる聖句の意味を充分に盡すことは到底出來ないが、聊か其教訓について考へて見やう。」かくして我々は勉めて外見を張るやうなことを避けねばならぬ。しかし之に依りて我々の利用し得ると思ふ聖句を使用することを恐るゝ要はないのである。

(三) 奇異に見ゆる題詞を選ぶ事は大抵の場合に於てはよくない。説教に滑稽を交える時には屹度前以て準備したるものでなく偶發的のものでなければならぬ。或る人々に於ては奇怪なる語句を多く用ゆるも而も極く自然に直様何の苦もなく嚴肅に復歸するが故に、滑稽も敢て咎むべき處はなく、反つて時々は滑稽と眞面目との對象を強くして其の効果を一層大ならしむるのである。さりながら努めて面白からしめんとしたり、又は前以て目論んだ様に見えるもの

は眞正なる嚴肅と相容れない感を起さしむる。それ題詞は勿論周到なる注意の下に選ばれるのであるからして、奇異なのはよくない効果を持つものである。併し聖書の語中には奇怪に見えるものでも之を善用することが出来る。例へばウキリヤム、ジエイが何西阿七章八節の「エフライムはかへさゝる餽餅くわいひんとなれり」を取りて立派な説教を爲て居る。

〔四〕有觸れた題詞であるからとて之を避るな。或る題詞が多くの人々に取り有觸れたものとなつて居ると云ふは、それが明かに良い題詞であると云ふ證據ではなからうか。「神は其の獨子を給ふ程に云々」之は疑はずして信すべき話なり云々、即ちルーテルが之は聖書全體の縮圖であると云ふので「小聖書」と稱んだが、是等の豊富にして成果多き聖句を用ゆる事を憚るは餘りに新奇を好み過ると

云はねばならぬ。かゝる聖句の意義併に應用に關し、講壇の傳説を棄て、親しく且つ熱心に之を研究する人は、恰もカリホルニヤに於ける巧なる金鑛探見者が時々他の多數の探見者等が踏査したる其跡を追ふて進み、而も豊富なるものを發見するが如く、自分に取り又聽衆に取りて、多くの新しきものを發見する事が屢である。のみならず、我等の求むる處は絶對的の新奇ではなくして、寧ろ單に新鮮である。有觸れたる題詞を取り、之に祈に満ちたる考察を施すことにより、我等併に聽衆に新鮮なる興味を興ふる様な見解を下したり、例證を擧げたりすれば、其の聖句の富源は善良なる結果を擧るに至るであらう。アレキサンダー氏は大彫刻家併に畫家の多くは同一の題を取つたと云ふ事實に注意を促して居るが、ギリシヤの悲劇作者も同様であつた。彼は云ふた、「或る人々は陳腐なる題目を避るに急

にして其の最大なるものを看過するが如きものである」と。事實から云へば大説教者等、又凡ての良い説教者等は、大なる題詞と大問題とに就て説教をして居る。弱き人は大題目を捉ふるにあらずんば如何でか其の力量を發達させる事が出来やうか。人或は邊境の片隅や、不毛の磽地いぢぢを耕して多少の收穫を得る事が出来やう。されど穀物の大部分、即ち家族を養ふ所のものは廣き田野より來るのである。

(五) 聖書の或る部分を習慣的に看過してはならぬ。或る人々は舊約聖書を看過し、之が爲め神の性格を説明すべき富源、併に神の攝理の方法と、人類の生活併に義務に關する無數の實例、及び來らんとする救主に關する様々なる典型や、豫告等を見失つて居る。又他の人々は殆ど舊約聖書からばかり説教をする。是等の人々は「恩惠の教

理」と福音の靈性的なる事とを好まざる人々か。さもなくば基督及び彼の使徒等の率直なる教を喜ばず寧ろ舊約歴史や、豫言や、箴言などにある凡てのものを捉へて之を勝手氣儘に解釋して靈的の意義を附加へると云ふ想像的寓意を能事とする人々である。

我等は神の語の新舊何れをも、又其何の書をも看過してはならない。長い歲月の間に説教者は聖書の何れの部分よりも多少の題詞を取らなければならぬ筈である。勿論其の人の特殊な心意の構成併に趣味によるか、又は福音的實際的の事柄が比較的によくあると云ふので或る書より殊に多くを選むと云ふは勿論の事である。

(六) 聖書の解釋研究の結果本來聖書の語てなかつたと判明した句を題詞として取つてはならぬ。例へば多くの人々が好むで題詞とする使徒行傳九章六節「主よ我に何をな行しめんと爲給や」は疑もな

く本来のものではないからして之を聖句として引用してはならぬ。之に反して使徒行傳二十二章十節にあるパウロが悔改たる時に發したる、『主よ我れ何を爲すべきか』は同一の思想を表して居るが取つてよい。約翰第一書五章七節にある有名なる句即ち『證を作すものは三つ即ち靈と水と血この三つの者の歸する所は一なり』は又本来のものでないと云ふことは明かである。使徒行傳八章三十七節『ピリポ曰ひけるは爾もし全き心を以て信せば可らん彼こたへて曰けるは我れイエスキリストは神の子なりと信す』も又真正なものでないと云ふ證據が充分であるから題詞として用ゐてはならない。其の他大に疑ふべき句節は約翰七章五十三節より八章十一節に至るかの姦淫に由り捕へられたる婦人の記事又馬可傳十六章の九節より二十節等である。英語を讀む人は改正譯英語聖書

を讀まば是等の點に注意する事が出來やう。

(七) 聖書に記載されてあるも靈感を受けざる人の語は題詞として用ゐてはならぬ。勿論其の語が聖書の他の所の教訓によりて眞なる事が知られ、又は我等が其の人々が云ふたと云ふ點に於て或る教訓を得んとする場合に別である。例へば何人も列王記略下十八章にあるラブシヤケの高慢なる語を眞なりとして論ずるものはなからう。馬可傳二章七節の『斯人は何故かく惡口を云ふか神にあらずして誰か罪を赦す事を得ん』は學者の問ふたのであるが、之は正當なる問であるからして題詞としても可い。約翰傳七章四十六節『未だ斯人の如く言し人あらず』は下役したやくの言であるが、我等は其の眞理を承認するのみならずイエスを捕へんが爲めに遣されたる役人が深く感じたこと云ふ事實は一層其の意義を強くするのである。使徒

行傳五章三十八、九節にあるガマリエルの有名なる語も其の場合に於ける彼の語として極教訓的である。約百記に於て三人の友が語りたる多くの事柄は誤謬に満ちて居るし、又約百の云ふた語の内にも誤りを含むで居ると云ふ事は其書の後部に見える通りである。此等の語は議論の一部分としては甚だ面白く且つ教訓的であるが之に何等の説明をも加へずして其の儘眞理として取扱つてはならぬ。傳道の書にも之に類する語がある。兎に角靈感を受けざる人々の語は其の聯絡を調べ聖書全体の教へに照して見たる後に初めて題詞とすべきものである。

(八) 牧會事業に従事する人は題詞を選ぶに當り數個の心掛が大切である。其の一つは會衆の現在の有様を注意する事である。ピーチャーは此の事を大に主張し、かく云ふた。「諸君は諸君の牧會生活に

於て、間もなく自分の説教の事や、何を語らんかとする事よりも教會員の事に就て考へ、彼等の爲めに何を爲すべきかと考へる様になるであらうが、之は可い徴候である」と。第二の心掛は近頃説教をした題詞の性質は何なるものであつたかと云ふ事である。我々は問題を選ぶ事に於ても、又それを論ずる方法に於ても單調に陥る事を避けて、前後の説教の關係によりて相互の効果を増進する様に計らなければならぬ。されば時には説教の系列を前以て作つて見るが可い、しかし何時でも前に如何なる説教をしたかと云ふ事を考へて其に適當なる關係を付ける事が大切である。之が爲に、又他の事の爲にも、説教者は自分がした説教の時と、場所と、題詞とを記録して置くべきである。第三に尤も大切なる心掛は其の時に自分が興味を感じて居る事柄を選ぶと云ふ事である、之れでなければ他人に強き

興味を引起さしむる事は出来ぬ。以上三種の心掛は時には多小衝突するかも知れない、されば我等は大に務めて其の平衡を保たねばならぬ。

第二章

題詞の解釋

- 一、周到なる注意を以て正確に解釋すべきこと
- 二、題詞解釋上誤謬を生ずる主因
- 三、屢々誤用さるゝ題詞の例
- 四、題詞研究上の注意

第一節 周到なる注意を以て正確に解釋すべきこと

説教者の重大なる任務の一は其題詞を本來の意義に解釋し、又之を本來の意義に従つて應用することである。説教者は神の言葉にて人を教へる爲に又奨励する爲に講壇の上に立つのであるから、聖書より特別の言葉を選定して題詞となし人の前に語る時には、神が其言葉の

内に置き給ひし意義を布衍するのであると云ふ事は云ふに及ばぬ。若し題詞に束縛さるゝ事を屑しとしないならば寧ろ題詞を用ゐず説教する方がよろしい併し苟しくも題詞を用ゐる其教訓を展開し又之を應用するに當ては其題詞の意味を正確に現はすべき義務がある。以上の事は分り切つた様な事であるのに尙屢々破らるゝは悲しむべき事である。即ち或は解釋に就て無學に安んずるより或は解釋法に不注意なるにより或は附會的の意義を附することにより又は粗忽にも便宜上自分の都合よき様に新らしき意味を聖句に加ふる事などによりて聖書の意義と全く相反するが如き説教をする人も度々見える。其人々は云ふ此言葉の本來の意味はかくくであるが今秋は次の様な意味に用ゐようと思ふと。これは外の言葉で云ふならば神の言葉を教へんとして講壇に立ちながら厚かましくも聖書にない所の

教訓を述べんと公言するのではあるまいか。或人々は又云ふ此聖句は斯様な意味合であるかも知れないと併しあるかも知れないと云ふことは此の意味であると云ふとは違ふ。聖書著者の考へに全く相反するが如くに聖書を了解するに當つては之を聖句と云ふことは出来ぬ。或人々は云ふ聖書の言葉は意味深長であるから其色々な意義の内に今予が述べんとする意味も含んで居ると思ふと併し果して其様に多くの意味があるならば何等の異議を申立つる事はないけれども自分の便宜の爲めに之を云ふならば之は至つて薄弱なる遁辭と云はねばならぬ。苟しくも説教者として聖書の眞意を知り且つ之を人々に教ふる地位に立つ所の人が云ふべき言葉ではなからう。かくの如き人は人を誤るのみならず實に神の前に罪を犯す人である。

フィリップスブルックスは左の數言の内に此事を云ひ盡して居る。

『其題詞に含まれてないと思ふ所の意義をそれより引出してはならない、若し其題詞が丁度自分の求むる所の眞理を表はして居らぬ時は、之を表はして居る外の題詞を選んだ方がよろしい。若し聖書の内に適當の題詞を發見する事が出来ない時は寧ろ題詞を用ゐずして説教する方がよい』。同じ事をフェルプスは左の如く云ふて居る『論理上聖書に教へられてない所の諸問題に勞力の大部分を費すは偏見的牧會であつて聖書の牧會ではない』。

然れども嚴密なる解釋を極端に施してはよくない。通例説教をする時には其題詞より聯想を浮べらるゝ事柄につきてのみ語るべきものであるが、必ずしも之に制限さるゝには及ばぬ。一つの事に應用する事の出来る題詞を他の事に應用して少しも差支へのない場合がある。パウロは眞理又は義務の特別なる問題に關して廣き原理を述べ

て居る。例へば加拉太書六章七節の『人の播くところのものは亦其穫るところと爲るなり』の如き、此句は教役者の給料の爲に金を出す義務に係はる事であるが、尙一般の眞理として様々の事に應用してもよろしい。又時として是一般の事に亘る誠めを或特殊の場合に應用する事が出来る。例へば帖撒羅尼迦前書五章二十一、二十二節にあるパウロの高尙なる勸告、『凡の^{かんが}こと察へて其善きものを守り諸の惡事の類に遠かるべし』の如きは特殊の場合の様々なるものに應用して毫も不都合はない。かくの如き題詞は神の言葉を正確に又誠實に使用せんと苦心して居る所の謹慎なる説教者に大なる慰めを與ふるものである。此題詞を用ゐて若し其事が實際罪惡なる事を證明する事が出来るならば、如何なる種類の罪惡に對しても、題詞として使用する事が出来る。勿論外に適當の題詞があつて其罪を責むるに更に切實

なるものがあらばそれを取るがよいが、丁度適當する題詞を發見するは困難な事がある。或場合に於ては題詞によりて與へらるゝ教訓を基礎として、進んで之に關係せる諸眞理に及ぼす事も出来る。斯くの如く題詞の應用を廣むる場合に於ても聖書著者の目的と離るゝことなき方向を取らなければならぬ。アモス書四章の十二節にある「爾の神に會ふ備をせよ」を取り、此句は國民の面前に横はつて居る神の審判を指したのであるが、今日も尙ほ之を應用する事が出来る、即ち吾人は今日罪の生涯を續けるならば神の前に出でなければならぬ故永遠の爲めに備へをなすべきものであると聽衆に訴へる事が出来る。是決して題詞を曲解して使用するのではない、著者が心中に懷きたる觀念を更に進めたのみである。されば此場合に於けるが如く此題詞があらはす所の意義を取るは決して不適當の事とは云はれぬ。然る

に一説教者が「我に何の虧けたるところある乎」(馬太十九ノ二十を)取りて傳道事業に關する説教をなし、基督教傳道事業の成功に吾人が虧けて居る所のものは何ぞやと云ふ事を論ずるが如きは、之は法外の事である。之は極端の例であるが、幾多の説教は全く誤用されたる題詞に基きてなされて居る。

フェルプスは此便宜主義に就てよく論じて居る。氏は之を三種に分けて居る。即ち(一)發音の相似たるものを取るもの、例へば「人を審判くなかれ恐らくは爾曹も審判かれん」と云ふ言葉を取りて裁判官の務めについて説教をなすが如きもの、之は正に兒戯と等しきものである。(二)比喩的類似に基くもの。氏は之を退けて居る。是尙後章に於て論ずるが如く附會に過ぎぬ。(三)題詞と主題との間に存する或原則の相似たるに基くもの。是は若し深き注意を以てなすに當りては

宥すべきものであると氏は考へて居る。即ち之は前節に於て論じた所のものと殆んど同一のものである。

茲に申添ゆべき事は題詞が其連絡上一個以上の意義を含む場合には吾人の目的に對して甚だ漠然たるものなるが故に之を捨るか、若しくは其内にて真意らしく見ゆる所のものを取り、之にのみ吾人の注意を注がんと告げてから取りかゝる事がよからう。之に反して異りたる様々の意義を變るゝ述べ來りてそれにつきて實際的の應用を施すはよくない。我等は神の言葉を人心に印象するに當り出来るだけ其題詞の實際の意義を確定せるものを以てしなればならない。

題詞を格言として使用するは宥すべき事であるか。之は問題である。ホブキン氏は此事に全然反對をして適當なる辨別と注意とを以てせば格言的題詞を用ゆるも時にはよからうと云ふて居る。格言的

題詞とは如何なるものであるかと云ふに、それは表紙の裏面、書籍の巻頭に於ける拔萃の如きもので、其言葉が間接に論究する所のものに關係して居るものを云ふのである。ホブキン氏が云へる如く「題詞」はかくの如き場合に於て「遁辭」に過ぎない。しかし時々かゝる風に題詞を用ゆることは正に適當である、詳言すれば適當なる題詞を發見する事の出来ない様な或る特別な問題を論ずる必要が起つた時には、自分の問題に當籤る様に聖書を曲解する事はよくない、かゝる時に當りて取るべき方法は題詞を使用せずして演説をなすべきか、又は格言として題詞を擇ぶべきか何れかを取らなければなるまい。何れを取るべきかと云ふに、時には一方を取り時には他方を取るがよい。第一の場合に於ては説教者は題詞について説教せず、寧ろ演説をなすと云ふ事を言明すべき筈である。又第二の場合に於ては念を入れて題詞を解

釋しそが眞正の意義と應用とを求めなければならぬ。かくして説教者は此題詞に相當なる説明を加へ應用を施して其問題に如何なる關係を有するかを示すがよい。或説教者が嘗つて南部バプテスト大會に於て記念説教をなせる時に其題詞として申命記三十三章二十三節「ナフタリよ汝は大に福祉を蒙りエホバの恩恵に潤ほふて西と南の部を獲ん」を擇んだ事がある。之は格言として眞に其場合に適當なものであつた。勿論此説教者はナフタリの黨は南部バプテスト派の型であるとか、又はモーゼが此祝福を下せし時に預言の内に此ことを指したと云ふが如き附會な事は云はなかつた。

説教者が其題詞を正當に解釋せんと切望するも之を成就する事は決して容易の業ではなからう、此困難に打ち克つ道は専心努力を事とするより外に途はない。聖書解釋の大問題は説教學の部門に入るべ

きものではないが、説教者が題詞を解釋するに當り心得なければならぬ大切な事柄について、少しく茲に論ずるも敢て不當な事ではなからう。

第二節 題詞解釋上誤謬を生ずる主因

(一) 題詞の字句を誤解するが故に屢々解釋に誤謬を生ずる事がある。言語は誤解を免るゝ様に全然正確に思想を發表する事が出来るものではない、簡易にして通俗体の文章に於ては殊に多くの省略、破格の組立、様々の意義を有する至つて曖昧なる言葉や、其他色々不明を來す原因を有して居る、されば啓示が人類の言語によりて與へられ、人々の腑に落ちる様な概して通俗の文体によりて云ひ、あらはされ、老幼男女の別なく、學者と無學者に拘はらず容易く之を了解する事が出来る様なものとなさんとせば、かくの如き啓示に於て其詳細に亘り正確な

る意義を確めんとするに當り、疑問の生ずるは又已むを得ざる事である。其物語、其議論、其獎勵の大体の意義は明白であつて、又それが聴衆の上に與ふる所の實際上の印象は明瞭であつても、尙其詳細を批評せんとする人々に取りては、殊に先入の見を有する人々に取りては、様々な意義に解釋する事の出来る様な數多の言葉を發見したり、又其正確なる意義を疑ふに至るかも知れない。とは云へ確かに此方は寧ろ單調にして講義風な極めて科學的の文体を以て綴られた啓示よりも遙かに優つて居る。若し神の啓示がかくの如きものであつたならば、遂には絶對的正確を失ふのみならず、徹頭徹尾普通の人心に興味を與ふる事は出来ないだらう。されば聖書の言葉を解釋する時に當り、他のあらゆる國語に於けると等しく、大なる注意を施すべき忠告を喜んで受けたいものである。

のみならず我等の目前には異様の事物が横はつて居る。それは何かと云ふに我等の多くは譯文を解釋しなければならぬ。然るに如何に善良なる譯文であつても必然不完全なるを免れぬ。異りたる國語に於ける二個の言葉が同一の形態に於て同一量の意義を正確に含有し、之によりて同一様の聯想並に暗示を與ふると云ふ事は殆んどない。又其國語特有の組立上の差異も亦原文には正確であるのに譯文に於てそれを曖昧ならしむる事もあり、又原文には一般的の事であるのを譯文に於てあまり制限したる意義となす事もあらう。殊に屢々起る事は希伯來語や希臘語に於て、其組立より文章に力を付ける事があるが、之を他の國の語に直す時は同じ様な力を付ける事は六ヶ敷い。之を我等のジェームス王の時代に出來た英譯について考ふるに一般に云はゞ其文体はまことに美はしくして他の普通の譯書に、其の正確

なる點に於て、之と匹敵すべきものがない程であるにも拘はらず、少なからざる誤謬を有し、又今日已に不用に屬し其意義を變じたる所の種々の言葉や句法を有して居る。されば、とて説教者たるものが己が取りたる題詞の真正なる意義を確定せんが爲めに熱心に努力すること、を怠り或は之が爲に失望すべき筈のものではない。博く聖書を讀み、又絶へず敬虔の念を以て之を讀み己が取れる題詞の前後の聯絡に心を留め、其特有なる思想の形式並に表彰の特徴に同情を表しつゝ、之を同一の問題或は之に類する問題を論じてある所の色々なる他の場所と較べたり、又は學識あり據るに足るべき註釋者の著書を參考する事によりて、此種の困難を免れんとするならば、單に翻譯書を用ゐて説教するの人々と云へども、聖書解釋に大に成功する事が出来よう。浸禮教會又はメソヂスト教會及び其他の教會に屬せる所の説教者の説教

並に著書は此の事の誤らざるを證して居る。見よアンドリュウ、フラ川の如きは原語の知識を特別に持つて居つた人ではなかつたが、しかし彼が聖書を解釋せしものを見るに殆んど匹敵する事の出来ない程明晰にして又正確である。

之に反し解釋に當りて原語を使用する人は輕卒に調べたり、或は至つて皮相的の智識によりて誤解に陥るの危険を持つて居る。されば夫等の國語の正確なる知識は極めて必要である。困難なる句節を了解せんとせば希伯來語及び希臘語を知らなければならぬと云ふ人があるが、寧ろ逆理の様に聞えるかは知らないけれども、反つて容易き句節を了解するに當りて是等の國語を知るは大なる裨益を與ふるものと云はねばならぬ。困難なる句節を研究するに當りて原語の知識を持たば多くの異りたる解釋の内より、一個の解釋を選択するに當り更

に大なる確信と正確とを以て之をなすことが出来る。勿論之によりて何か新らしき見解を得んとせば普通よりも更に深き知識を持たなければなるまい。學問があるならば是等の事は明らかになるだらうと云ふて自らの不明を嘆ずるが如き心配は原語を知る人には無用である。如何となれば多くの場合に於ては前後の連絡又は聖書全體の教訓に照らして判断するより別に仕方はないからである。しかし聖書の大部分に關しては原語を少しなりとも知らば聖書著者と知識上の同情を保つことが出来ること云ふ便利を與ふるものである。

聖書の言語は希伯來精神に一貫せられ多くの點に於て吾人と全く異りたる東洋風の思想の形式を備へて居る。此事は新約聖書の希臘語に於ても多く見る事が出来るが殊に舊約聖書に於て著しく發見するのである。希伯來語聖書の數葉を讀むのみにも、正確なる解釋を

する事は出来ないまでも、聖書的方式の思考法並に表彰の特徴などに對し同情的の了解を人に與へるものである。勿論希伯來語及び希臘語に熟達するに於ては其利益は單に此に止まるものではない。其効果は恰もパレスチナに於ける旅行のそれと似て居る。さればとて是等の國語を研究する事が出来る人は、聖書の口調を捕へる事、又各著者の獨特の口調をも捕へることを熱心につとめなければならぬ。何人にも知らず識らずの間に或程度までは之に達して居る。

『聖書の言語には要なる言葉が其處此處に散在す。若し是等の言葉の意義を精密に捕へなば其が聖書全體の鍵となるべし。若し是等の言葉を探るに當り、翻譯者が我等の國語に當符めたる言葉の普通の意義にのみ全然依らば重大なる誤謬に陥るの危険に遭遇せん。例へば肉、靈、心、畏、信仰、悟、愚、光、暗、正義、救、恩、惠、善、者、惡、者などの語の如き是なり。

翻譯者は此等の言葉を諸君の爲めに翻譯せり、諸君は此等の諸觀念を自ら翻譯せざるべからず』(グネット)。

此の如き主要なる命辭の聖書の術語は讀書により又一般の觀察によりて學ぶ事も出来るが聖書用語辭典の助により、又は是等の語が用ゐられて居る多くの場合を比較研究することによりて更に精密に知ることが出来る。

聖書の言語は概して哲學的のものではなく通俗的のものである、科學的のものではなくして詩歌的のものである。緻密なる區別や正確なる敘事を事とする分解的の言語ではなくして具體的の言葉に滿てる綜合的の言語である、抽象的のものではなくして實際の事物並に實際の經驗上の事實を現すものであつて、其意義は確然なる區劃を有せずして一つの意義より他の意義に移るが如き有様を呈して居る。か

かる性質を有するが故に聖書の中には多く奇異なる言葉遣ひを發見するのである。是等のことの心得は多くの題詞を解釋するに當り甚だ大切である。

『詩歌的國語、所謂詩歌的國民の言葉は聽衆の想像によりて自由に其意義を増減して了解せしめんと務むるものなり』。例へば第一約翰書三の九『神によりて生れたるものは罪を犯さず』、路加十六の十五『人の崇ぶ所のものは神の前に惡るものなり』、路加十四の廿六『我に來りてその父母……我弟子となる事を得ず』、以上は其言葉遣ひを甚だ誇大にしたものであるが又左の如きものは言葉遣ひを縮少したものである。以弗所五ノ十一『果を結ばざる暗き行』。

『詩歌的の言語は相對的なるものを絶對的のものとなし、絶對的のものを相對的のものとなすを喜ぶのである』。例へば前者の例は路加十

四の十二「爾午餐或ひは晚餐を設るとき朋友兄弟親戚又富める隣の人を請くなかれ……貧乏癡疾跛者瞽者などを請け」。之は友達や親戚人富める隣人などを招く事を絶對的に禁じ又全く之と反對の種類の^や々のみを招くべしとの命令をあらはすやうである。けれども我等の主はそう云ふ意味で云はれたのでない、又かふ云ふ意味に解釋する處の人は誰もなからう。當然の事として人々は親戚や富める者や其他の人々を招くのであるが之は自然的の人情又は社交の爲めになすのであるから之が爲に宗教上の酬いを受けないのである。しかし貧しき者や哀れなる者を招く事は宗教上の理由に基き又神の酬^{おほい}を得んとの望みをもつてなす事は甚だ大切なる事であるが故に、主は此大切なる事と比ぶれば前に云ふたものは全くなしてはならぬものゝ様に云はれたのである。箴言八の十に先づ絶對的に叙べ、然る後に之と并

せて相對的に叙べてあるを見る。「なんぢら銀をうくるよりは我教をうけよ精金よりも寧ろ知識をうけよ」。此處では第一の句は銀を受けたる事を絶對的に禁じたのであると取るべきではない、たゞ第二の句に表はされて居る同一の思想を深く感せしむる爲めに力を入れて言ふたに過ぎない。創世記四五ノ八「我を此處に遣はしたるものは汝等にあらす神なり」又耶利米亞七ノ廿二、廿三「そは我等の先祖をエジプトより導き出せし日に燔祭と犠牲とについて語りし事なく又命せしことなし惟われ此事を彼等に命じ汝等我聲を聽かば我汝らの神となり汝ら我民とならん」とあるが神が先祖等に犠牲の事についてくわしく語り給ひしと云ふ事は明かである、しかし更に大切なる事は服従と云ふ事であるから、之に較べて見るならば犠牲の事は殆んど無きが如きものとせられたのである。馬太傳九ノ十三「我舒恤を欲みて

祭祀を欲まず』などは明かなものである。之と同一の原理を彼得前書三ノ三『爾曹の裝飾は髪を辮、金を掛け又衣を着るが如き外面の裝飾に非ずただ心の内の隠たる人……柔和、恬靜なる靈を以て裝飾とすべし』(提摩太前書二ノ九參照)と、此處に於て使徒パウロはありとあらゆる外部的裝飾を禁じたのと思ふてはならぬ、矢張り親戚を招く事や銀を受くる事や犠牲を捧ぐる事を禁じた場合と同じ様に考へなければならぬ、即ち婦人が大に貴ぶ所の美はしき外見上の飾りものは到底神の眼に於て大なる價を有する、朽ち果てざる飾物と比較する事の出來ないものであると云ふ意味である。是絶對的の叙述であるが相對的の意義に取るべきものである、且又絶對的の形によりて大に力強く又印象を深くせんとの趣意に基きたるものである。聖句はかく解釋する事が正當であるとすれば、宗教的團體の内で、聖書の内に屢々相對

的のものに對して絶對的の言葉を以て其意義を強むるのであると云ふ事を考へざるが爲めに、人が自然的に飾を愛すると云ふ事に反對して且つこれを禁止せんとするものあるは至つて考へたらぬ事である。之と同時に他の多數の人々は之と同様な誤解に陥り、外形上のものを輕視しても内的裝飾を深く考へなければならぬと云ふ熱烈なる勸言を了解して居らぬ。次に絶對的なる者、代りに相對的のものを使用するもの、例は次の如きものである。路加十八ノ十四『此人は彼人よりは義と爲れて家に歸たり』此意味は税吏は義とせられ、豫想外にもパリサイ人は反つて義とせられなかつたと云ふ意味である。詩歌的の言語は特稱的の者を全稱的のものとなし、全稱的のものを特稱的のものとするのである、即ち其頂上に於て命ずる事もあり又其基礎に於て命ずる事もある。出埃及記二十ノ十六『汝其隣人に對し

て虚妄の證據を立つるなかれ』の如きである。又時には相互に密接に關係して居る觀念を明かに區別しない、例へば悪しきものと愚かなるものとの如きである。同意語や對句を用ゐる事を好んで居る、例へば詩篇百十九ノ百〇五『汝の聖言はわが足の燈火わが路のひかりなり』の如きである。又詩篇五十一ノ十『ああ神よ我ために清心をつくりわが衷になほき靈をあらたにおこしたまへ』に於けるが如く其分類の仕方は科學的ではない。かゝる種類の者は新舊約聖書中に澤山ある。殊に預言書や福音書などの内には形容詞や實名詞を列擧して辯説の區分の基礎として使はれたるもので甚だ不適當なる者を屢々發見するのである。例へば彼得前書四ノ十八『もし義者僅じて救はるゝを得ば神を敬はざる者と罪人は何處に立たんや』に於て神を敬はざる者と罪人とは全く異なる二種類の人々を對照したものの、様に考へるの

が普通であるが之は不正當の解釋である。實際希臘語の組立から考へて見ても、かく取る事は許されない。之と等しく彼得後書一ノ五―七『信仰に徳を加へ徳に知識を加へ知識に擗節を加へ……』に於ける數個の言葉の意義を無理に追求する人があるが愚なる事である。聖書の原語は以上論じたる如きものである。しかのみならず時代の異なるに従ひ又著者の異なるに従つて各特殊の文體を持つて居る。(二)題詞の前後の關係を無視するが爲説明に誤謬を生ずる事がある。或場合に於て一個の句節を取り之を其聯絡より分離するならば甚だ間違つた意味の者となる事がある、例へば哥林多後書十二ノ十六『巧なるものなるにより詭計をもて汝等を牢籠るなり』の如きあり、或は絶對的に人を絶望せしむる程曖昧なるものや、全然漠然なものとなる事がある。殆んどあらゆる場合に當り充分に了解せんと欲せば先づ其

聯絡を調査しなければならぬ。箴言の或部分に於けるが如く數個の句が全く分離して居る様に見ゆる場合に於ても是等のものは著者又は編輯者が之を念頭に浮べた時に如何なる方面の事物に關係を持たしめたのであるかと云ふ事を知るを勉むるならば少なからぬ助けを得る事がある。詩篇に於ても(百十九篇の如きに於ても)我等がたよりとすべき一般の順序が必ずある。物語や詩歌的の諸書や、辯論や又は書簡的の議論などに於ても聯絡を探ることはまことに大切である。苟くも常識を有する人は或種類の本を取り其處此處に散見して居る一字一句を取り聯絡を全く無視して説明せんとするものはなからう。若し農學者なり機械師なり、醫者なり、法律家なりが銘々據典とする所の著書を取り其内より分離せる一字一句を抜き取りて解釋を試るものがあつたならば愚かなるものと云はなければなるまい。

然るに常識を有する人でありながら聖書より題詞を取るに當り其聯絡を探る事を怠り又は之を知りつゝもかゝる無法なる事をなすは如何なる譯であるか。其譯は一は後に論せんとする所の比喩的に聖書の意味を解釋する習慣が因襲久きをなし且つ廣く行はるゝが故である。かく比喩的に解釋すれば前後の關係より取り離して、眞に都合よく使用する事が出来る處から聖書の言語は、外の言語とは全く異り、普通解釋法と全く異りたる原理にて説明すべきものであると人々が思ふて居るからである。宇宙ユニヴァース神教や羅馬教やモルモン宗の人々をして、彼等の異端も一見聖書に根據を有するものであると思はしめたのは悲しむべき事實である。第二の理由は簡單なる題詞のみを用ゐるところから起つたのである。普通の能力を有する人は聖書の簡單なる句節を取り、之を其前後の聯絡から説明したのでは一個の説教を作

るだけの材料に不足を感ずる所から、聯絡上許さざる處の餘計な應用をなさんとするのである。或は又其文章を前後の聯絡より取り離し全く新らしき應用を之に加へるのである。かゝる事に餘儀なくせられ、又善良にして尊敬すべき人々の模範に勵まされ自分勝手な説明をするに至るのである。此習慣が一度作らるゝや怠惰の心に勵まされ前後の關係を研究する事は度々五月蠅く感ずるのである。

前後の關係を無視して解釋する習慣を生じたもう一の原因は六百年ばかり前に聖書を章に區分した事と、又それを今日より三百年ばかり前に節に小分した事である。之は引照の便利の爲であるが、聖書ばかりでなく希臘語又は拉典語の著者の原文にもかゝる章節を加へて居る。併し古典文學に於ては其大なる區分、即ち章のみが離されて印刷されて居るが、其小區分は内容に従つて一所に集められて居る故、節

はたゞ原文の内に又は其冒頭に付けられてある。然るに不幸にも聖書を印刷するに當りては之と全く異り、ゼネバ翻譯を始めとし各節を離して印刷する事が普通となつた。印刷の此方法の始まりしは恐らく詩篇の組立が特別の形をなして居るからであらう、即ち各文は全く相離れて居る事が屢々であるのみならず、かく印刷する事は節を發見するに當り勞力を省く益がある。又或時代に於ては引照は今日我等の聖書に於て見るのとは異り各節離れて印刷されて居つたのである。兎に角之が永き間の習慣となつた。然るにかく章節に區分するに當り甚不注意なりしが爲め前後の關係を無視し其意味を曖昧にしたのが間々ある。簡單なる文章や其幾部分を離れ、に印刷するに當りては一般的の聯絡を保ちて之を讀む事の更に六ヶ敷なるのは當然の事である。殊に我等は他の書籍を讀むに當り、段落を異にして區分さ

れたるものは前後の聯絡を明らかに示す者なる事を見馴れて居るが故に更に六ヶ敷感するのである。其結果として説教者にも又聽衆にも各章各節はそれ〴〵離れ〴〵に全き者であると思はしむるに至つたのである。或章の終の部分と次の章の始めの部分とを續けて讀むならば物語又は議論の實際の聯絡が眞に明瞭になる様な場合に於ても、公の席に於て聖書をかくの如く讀む人は少いと云ふ事は面白き事實である。且又或節の終りの數言と次の節の始めの數言とを題詞として取るならば人々は如何に奇異に感ずるであらう。かくの如き誤りたる考へ、即ち各節を一段落である如く考へ又各章を殆んど分離せる書卷の如く考へる誤りを取り去るは教役者たる否とに關らず苟しくも聖書をよく了解せんとする人々に極めて重大なる事柄である。(幸ひにして日本語に於ては各節を別行に印刷してはない。譯者註)

既に説き來りし所により、説教者は神の言葉を正當に解釋せんと欲せば前後の聯絡に充分なる注意を與へずして題詞を解釋してはならないと云ふ事は明かである。以上の事により幾多の熱心にして力量ある教役者でありながら此點に就て其方針を誤つた理由を發見する事が出來よう。併し一度此點に注意を受けたものは實際に當りて深く注意すべき筈である。神の名に於て人の前に立ち恵みある聖書の一句が字句上又は聯絡上、自分が考ふる處のものと異なりたる意義を有すると云ふ事であるならば如何にして己が重大なる責任を盡す事が出來ようか。

(三) 題詞解釋上誤謬を生ずる第三の主因は牽強附會に陥る事である。靈的の事物を顯はさんと思はば目に見えるものを借り來りて比喻によりて之を爲すより他に方法は無い。見る可らざる世界に關する

我等の思想は我等が現存する此世界より得たもので構成さるゝのである。スキデンボルグは物質界に於けるあらゆる事物に相當する所のものは心靈界に於ても發見することが出来るものである。又之が爲に聖書が書れたものであると云ふたが、併し斯る事を證明する事は到底不可能の事であらう。然れど又目に見ゆるものと心靈的のものは單に比喩に過ぎないと云はゞ、之又他の極端に走つたものと云はなければならぬ。實に聖書は心靈界並に物質界の兩界に涉りて、密接なる關係と、離る可からざる適合との存在することを教へて居る。寓意的の言葉は此語の廣義に於て聖書に廣く又様々に使はれて居る。即ち律法の内に命せられて居る多の犠牲並に聖潔きよめの事などはキリストの事業並に靈の事業を示して居る。預言者等は目前に在る所の事物を用ひてメシヤの治世に關する事物を現はして居る。イスラエルの

の歴史は一方に於てはキリストの生涯の型であり又他方にありてキリストの教會の型であつた。

イスラエルの國都なるシオンは靈的イスラエル民族の未來を語る預言的畫像であつた。其歴史の人物例へばメルキセデク、モーゼ、ヨシヤ、ダビデ、クローヌなどは或る點に於て來らんとするメシヤに似て居つた。夫と妻との關係は神と此選民と、キリストと彼の教會とを比するに度々使はれた。サラとハガルの敵愾心は律法の束縛と福音の自由とを對象する爲に使はれたこともある。

如斯有様なるを以て、或る人々が聖書の言葉を無暗に牽強附會的に解釋するの傾向を有するは敢て怪むに足らぬ。オリゲンは基督教寓言作者の祖父であると云はれて居る。併し第二世紀に溯り既に此事は行はれてあつた。實にオリゲンは我等の主イエス、キリストと同時

代に生存した猶太人ファイローより之を學んだのである。アレキサンドリアに住居せる猶太人は永き間かゝる冥想に耽つて居つた。オリゲンの卓逸なる能力と學問と并に創作的の想像とは後世基督教徒の間に空想的の寓言を喜ぶに至れるに大に與つて力あつた。教父等の多數は何れも此弊害に陥り之が基督教の思想并に實行に及ぼした勢力は實に偉大な者であつて又悲むべき事である。尙今英國教會并に獨逸路帖教會に屬する最熱心にして學識ある人々の内、教父等に倣ふて寓意的の解釋を事とする人々は決して少くはない。其他諸教派に屬する所の無學なる説教者等は、銘々其地方に於ける年長者なる説教者より此方法を學び、極めて普通なる物語又は教訓の内より實に許す可からざる又亂暴極まる牽強附會な意義を引出す事がある。教父等の影響を受けて居らない教派に於ては更に進歩したる解釋法が行

はるゝに至つた例へば浸禮教派に於てはフルラー、ホール并に其他の人々の感化と、教役者教育の普及とに由り實に満足すべき變化を見るに至つたが尙餘弊は残つて居る。此等の有力にして尊敬を受けて居る數多の牧師等は今日も尙古風の牽強附會の桶を作り人をして不知不識之に習はしめて居る。想像に巧みな人は字句を穿鑿し前後の聯絡を緻密に研究して險はしき山路を辿るの勞を省き廣々とした自由の天地に逍遙するは更に容易く又愉快であらう。聽衆の側も亦珍らしき説明に全く氣を奪はれ、何所にも基督の型や、靈性的生活に適應する教訓を發見し得るを見て喜んで止まぬ。斯くて彼等は想像を燃し感情を温むる所の話は良い説教であると考へ、其説教は題詞の内に實際教へられて居らぬものなれど尙真理であつて聖書の教に適ふて居ると思ふのである。『斯る説教を聞きて、或人は極めて獨創的の思想で

あると思ふかも知れぬ。又説教者自分でも吾は創作的であると自認するかも知れぬ。斯る人は註釋書などは直に斥け、他の説教者と其意見を比較する必要ななどは少しも感じないのである。かゝる人は己が想像に頼るの外、何等他の材料の必要を認めぬ。然れば如斯説教の多くは單に空中に樓閣を築いたに過ぎぬ。

此方面に於ける誤謬は又次の事實に依りて更に其範圍を廣くする恐がある。それは聖書の語句を靈的の意に解釋するに當り、その程度まで之を恕す可かと云ふ事に關して確たる規矩を示す事が出来ないからである。舊約聖書にあるものを新約聖書著者が靈的の意味に解釋して居るものは勿論當を得て居る。多數の人々は之を規則とすべしと主張して、新約聖書に基礎を有せざるものは寓意的に了解すべき者でないと思ふて居る。併し理論上より云はゞ之は餘り嚴に失したる

規則である。なせと云ふに新約聖書中に靈的意義に使はれて居る事物に酷似した事物を、矢張靈的意義に説明する事が出来ないと思ふは酷ではなからうか。實際から云はゞ或題詞を取り之を説明するに最も安全な途は左の規則に遵ふことである。即ち新約聖書に使用されて居らぬものに寓意的の意義を與ふる時は斯くも説明し得べしと思ふに過ぬが故に之を取つて説教の眞髓としてはならぬ。勿論靈的の意義を以て解釋する事の出来ない様な聖書の言葉であつても、靈的の眞理を説く爲に色々用ふことが出来やう、別言すれば靈的の事物に適用する事の出来る様な原理を含んで居る事もある。勿論かゝる時に之は自分一個の考でかく説明するのであると思ふことを聽衆に知らせ聽衆も此心で耳を傾ける様にしなければならぬ。之に反しかゝる説明が聖書の教訓であると思はしめてはならぬ。或は又我らが

丁度自然界歴史、若くは日常生活より或る事物を捕へ來りて例となすが如くに靈的真理の好適例となし之を靈的に解釋するもよからふ。注意すべきは靈的の意義を有する比喩的の聖句を取るに當りては聖書著者の心中に在つたよりも更に詳細の事に迄亘りて其比喩の靈的意義を想像すると云ふ弊害に陥らぬ様に慎む事である。例へば主が『我軛を取りて』と云ひ給ひし語を取り來りて軛や牛に關して詳細なる事までも研究し細密に想像的の事物を列べ立てる必要はない。唯普通一般の意義を示した許りで充分。或は又『蛇の如く智く』、『われ爾曹を人を漁る者と爲さん』、其他之に類する數多の聖句を解釋するに當りても同一の原理を當て箝める事が出来る。宜しく我等は聖書記者又は其語を話したる者が如何なる目的を以て其比喩を語つたかを尋ね其範圍内に之を使用すべき者で決して之を過ぎてはならぬ。

主の比喩を説明するに此種の誤謬に陥るは多くの人々の通弊である。大教師が話し給へる物語は實に美はしく、又人を感激せしむる點に於て肩を並ぶるものは無いが、之等は實話ではなく例に過ぎない。これ尙我等が今日例として使用する比喩や事物と等しく、主が用る給ひしものも直接間接に相似たるもの又は相類するものに過ぎぬ。或ものは比較さるべき問題と多くの點に於て似て居るが、他の物は唯一點に於て似て居るのみである。例へばキリストの來たるは夜盜の來るに似て居ると云ふ場合其類似の點は不意と云ふ點丈である。來るもの性質及其目的に關し其他の事に關しては此例と其事柄とは全く似て居らぬ。或は馬太十三ノ三三にある神の國はパン種の如し女之を取りて三斗の粉に隠さば云々の場合、三と云ふ數に如何なる精神的の眞理が現はされて居るかを尋ね、又女とは教會を指すのか、パンを作

るに當り男を引出さないで女を引出したなどのことを論ずればとて何の利益になるであらふ。又例を説明するに當りては、其前後の關係を見、主は之に由りて何を教へんとし給ひしかを探り、其例が其問題に就て又は其問題の何れの方面に就て果して光を與へるものであるかを確かめ、最後に其物語の種々の事柄を一個々々分解し來りて何れの點まで適合するかを檢べなければならぬ。此最後に掲げた事柄に關しては極端に走る事を避け正確なる判斷を誤らず且つ譬は例證の爲であると云ふ事を忘れぬ様にしなければならぬ。キリストが教へ給ひし譬の一を取り來りてかゝる研究を施したる後、其真正の意義を解明し、之に基づきて適當な應用を施さんとする考を以て始めて之に就て説教する準備が整ふのである。

第三節 屢誤用さるゝ題詞の實例

講壇に於ける聖書解釋に關し近來各方面に著しき進歩を見る。併し尙ほ不注意な解釋が行るゝことを示さんが爲、今左に説教者等が題詞として用ゐる或は辯論の内に引用する聖句中、其句當然の意義より全く離れたるものゝ例を挙げやう。講壇の習慣は驚く可き程力あるもので、實力あり思慮ある人々と雖ども、自分等が若き時に聞いた解釋に満足し、少しく研究を施さば全く他の意義を發見するが如き説明を平氣で遣つて居る事が度々ある。左に掲ぐる例は已に論じ來れる三個の主因に歸すべきものである。

(一) 題詞の意義を誤解せる者 耶利米亞三ノ四、「汝いまより我を呼でいはざらんや我父よ汝はわが少時の交友なり」。此句は青年に對する説教に、また青年を相手にする書籍の表紙などに格言として屢々用ゐらるゝのであるが、此人々は思ふ此句は若き人々が天に在す父の

友となるべきを教へるものと併し之は全くの誤解である。かゝる解釋は聖書の意義と全く離れたるもので、又前後の關係を無視したるものと云はねばならぬ。猶箴言二ノ十七に於けるが如く「わかき時の侶」とは良人を指すので其希伯來原語は同一である。耶利米亞二章三章の聯絡を察するに神預言者をして國民を責め、國民は恰かも姦淫を犯せる女の如くなるが故に、亡ぼさるべきことを告げて國民を警醒せしめ神に立歸らしめんとしたのである。「汝今より我を呼ていはざらんや我父よ汝はわが少時の交友なり」と即ち汝は吾少時の夫であり吾少時の友であるから我は汝に歸らんと云ふ意味である、且つ父と云ふ言葉は此處に於ては猶ナアマンの僕が彼を我父と(列王記後書五〇十三)云へるが如く妻が夫を尊敬して云ふ言葉である。斯く此句は全く誤用されて居る。

詩篇二三ノ四、「たとひわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれじ」。多くの人々は此句を將に死に垂んとして居る時に當るものと見做して居るが、「死のかげ」とは死んだ人の居る暗き場所の事で、舊約聖書に於ては最も暗黒なる場所を示さんが爲に度々使用さるゝ比喩である。かく亞麼五ノ八に於て「神が昴宿及び參宿を作り死のかげを變じて朝となし晝を暗くして夜となし」云々とあるが、其意味は夜の暗黒と云ふ事を指して居る。又詩篇百七ノ十に「くらきと死の蔭とに居るもの患難とくろがねとに縛しめらるゝもの」とあるは牢屋の暗黒に關係して居る。又耶利米亞二の六に「かれらは我儕をエジプトの地より導き出し曠野なる岩穴ある荒たる地早きたる死の蔭の地云々」とあるが之は寂寞たる砂漠の暗黒を云ふたのである。以賽亞九ノ二に於ける「暗黒にあゆめる民は大なる光を見死蔭の地に

住める者のうへに光てらせり』は欠乏無智困難の暗黒を指したのである。其外多くの所に此句は使はれて居るが何れも暗黒を表はす言葉であつて、或は比喩的に或は字句的に使はれて居るが、何所にも死に關係して使はれては居らぬ。此詩二十三の四の比喩は猶太國にあり勝な狭くして深く且つ甚だ暗黒なる谷間を過ぎ野獸が兩岸の深林中に吠ゆるが如き所を羊牧者が羊を勞はり保護して行くと云ふので、所謂墓場の如く暗黒なる谷を通過するに當りても何等の苦痛をも感じないと云ふ意味である、即ち信者は如何なる出來事如何なる苦痛に遭遇するとも、もし牧者の面前にあり其保護を受くるに當りては誠に安全であると云ふ信仰的生涯の經驗を語るものである。誘惑にあれ疾病にあれ悲哀にあれ死にあれ何れにもあれ墓場の様に暗黒な谷を過るに當り遭遇するが如き事柄に適用が出来るのである。此句を正當

に解釋せりとて其意義を失ふものではない却て之を廣くするのである。提摩太前二ノ八「我ねがふ人潔き手を舉て怒なく疑なく何の處にても祈らん事を」。此處に人と云ふ言葉は女に對立して云ふ言葉即ち男子を意味するのである。之は禮拜の行儀に對して教へて居るのであるが、男子は何れの場所に於ても手を舉げ怒らず疑はず祈らなければならぬと云ふのである。此句は男子が禮拜の時に陥り易き弊を戒めたのである。故に次の節に女は意を美はしき服裝に費さずして良き行爲を以て飾らなければならぬと云ふて居る。

(二) 前後の聯絡を無視するもの 哥羅西二ノ廿一「捫る勿れ——觸る勿れ」は禁酒を教へる聖書の言葉であるなど、早呑込をした熱血的な演説者等が之を常用とし又旗などに書くこともあるが、少し注意して前後の關係を見れば、第一此問題に關係して話された言葉でな

きこと、第二我等が遁世主義に陥つてはならぬ爲めに與へられたものであることがわかる。』もし爾曹キリストと偕に死て世の小學より離れたらんには何ぞ世にありて日を送る者の如く人の命と教に循ひ捫る勿れ嘗^{あぢは}ふ勿れ觸る勿れと云ふ律法の下になるや。』聖書に禁酒に関する句節は澤山あるけれども之は其部に屬するものではない。

希伯來六ノ二『完全に進むべし』は、信者が現世にありて完全な罪のない生涯を送ることが出来ることと主張する人々が能く採る題詞である。併し之は知識のことを云ふたので、最高の智識に向つて進むべき事を促したに過ぎぬ。前章の末節にある「成人」と譯されたるものは「完全」と云ふ意義である。斯く此兩節は密接な言語上の聯絡を有するのみか其意義に於ても其關係を保つて居る。

哥前二ノ九『録して己を愛する者の爲に備へ給ひし者は目いまだ

見す耳いまだ聞ず人の心いまだ念ざる者なりと有が如し』は天國の榮と其幸福に關する者であるとして往々引用されるのである。然れど著者の意は救の計畫は人の心を以て想像する事も出来ないもの、實に如何にも偉大なものであると嘆稱したものであるは疑ふべくもない。以賽亞書一ノ五六『その頭はやまざる所なしその心はつかれはてたり足のうらより頭にいたる迄全き所なくたい創^キ痕と打傷と腫物とのみなり云々』。此句は人間の生れながらの墮落を説く爲の題詞として或は其例證として時々引かれるものであるが、之は其聯絡上不適當なるは知れ切つて居る。イスラエル國民が神の審判を蒙つた有様は、猶東洋諸國の殘酷な鞭撻の刑に於けるが如く、足の裏より頭に至るまで全き所なく只疵と打傷とに充されて居るもの、様であつた。又彼等の本國は荒廢に歸し、邑々は焼け、茫漠たる原野の内に孤立せるものは

唯エルサレムのみであつた。此時に當り預言者は汝何ぞ重ね戻りて尙撃たれんとするか云々と嘆聲を發したのである。汝等足より頭に至るまで打たれたれども何等改善の實をも擧げず、却て益惡に赴くのみである云ふたのである。然れば此句は國民に對し、或は團體に、或は個人に向て何故に困難に遭遇しても、之より學ぶことをせず、益其罪惡を深くするに至るか、の事を説くに最も適切な題詞であるが、之が人間の墮落に關するものであると云ふ證據はない。其頭はやまざる所なくて、ふ比喩は墮落を現はす所のものではなくして、寧ろ嚴しき譴責を示す所のものである。

以賽亞六三ノ一―三「此エドムよりきたり、あかきも緋衣をきて、あかきもボツラよりきたる者はたれぞ……之は義をもてかたり、大にすくひをほごす我なり、なんちの服飾よそははなにゆるゑに赤くなんちの衣はなにゆるゑに酒榨さかを

ふむ者とひとしきや云々」。此句は屢主基督が我等を救はんが爲血を流し、苦みを忍び給ふたことを表はすものと使はれるが、之は明かに敵の血に染んだ勝利者を指したのである。尙此事は次の四―六に依れば明瞭である。之を話したものはエドムの勝利者で、イスラエルの救手である。若し之を救主に適用したものと了解せんとせば、之が爲に敵に勝ち、此意味に於ける大なる救手である。と見て使はなければならぬ。黙十九ノ十六の處に之と同様な比喩を用ゐて神の語を叙して居るが、これも受難者の事ではなく勝利者の事を現はしたのである。列王記上十八ノ廿一「汝等何時まで二ツの物の間にまよふや」。此題詞は基督信者たらんとする人々の逡巡躊躇を責めんが爲に愛用さるゝものである。併しイスラエルの人々はエホバに事ふべきか、又バールに事ふべきかに就きて逡巡して居つたのではない、彼等は兩方に事へ

やうと考へて居つたのである。即ち一方朝廷に持て囃されて居た宗教に従ひ、同時に先祖等の宗教をも奉せんとした。故にイザヤは此二心を責め、エホバに事へるか何れかを選べ、兩者に事ふることは出来ぬと云ふたのである。

(三) 牽強附會な解釋 亞麼西六ノ一「身を安くしてシオンに居るもの思ひわづらはずしてサマリヤの山に居る者」爰に云ふシオンとは教會の事であるとか、身を安くする者とは教會内の無能な會員を指す者であるなど、解して、眠れる信者を誡むる教を引出す人々があるが、之は甚だ不當な解釋である。猶太人はエルサレム并にサマリヤの北部に幾多の城廓を構へて居つた。然るにエルサレムやサマリヤのみが安閑と安慰を貪ぼり、其罪惡を悔むることをせず、神に頼ることをせざるは禍であると云ふ意味である。戦争の時などに此句を引かば極適

切であらう。或は又人々が神に頼ることをせず、人間の力や外部的勢力にのみ依頼するを誡むる爲に使用することが出来やう、けれども此句を以て教會にある無能な信者を戒むるは適當でない。

出埃及二ノ九「此子をつれゆきて我ために之を養へ我その値を汝にとらせんと婦すなはち其子を取て之を養ふ」なか／＼有力な人々でありながら此句に基いて兩親や日曜學校教師の爲に説教をする者がある。其人々は云ふ「神は諸君に命じ給ふ此子を取れ」となど、しかし神は決してそんなことを此處に云はれたのではない。之はバロの娘がモーゼの母に云ふた言葉である、神が人に對して曰はれたのではない。然るに之に靈的の意義を加へんとするは言語同斷の事と云はねばならぬ。苟も説教者が題詞の意義に従ふと云ひながら斯んな解釋をするは決して聖書的の解釋ではない。之は神の云ふ所では

なくして説教者自らが云ふ所である。故に之は題詞と呼ぶ事の出来るものではない。題詞は聖書の言葉でなければならぬ。若し斯る説明を許すならば箴言二三ノ三十にある『酒に夜をふかせ』とは神の教訓で、詩篇十四ノ一『神なし』とは聖書の教ふる所であると云はなければなるまい。此の如き解釋法は到底許す可からざるものである。

約拿一ノ六『汝なんぞかく酣睡するや』。此句を取りて精神的に眠つて居る罪人を指すものであると説く説教者は如何なる理由に基いて之を云ふのであるか解らぬ。ヨナがヨバに至らんとして取急ぎ心あせり、疲れ果て、やつと乗船したが熟睡に陥つた。其時船長は驚きあせりて『汝なんぞ酣睡するや起て汝の神を呼べ』と叫んだのである。説教者たる者が眠りつゝある罪人に如斯語を發するは宜しい、併し此語は神の言葉であると云ふことは出来まい。斯る説教は説教者の言

葉に基くものであつて聖書に基くものではない。

箴言十八ノ廿四『兄弟よりもたのもしき知己もまたあり』。此句を取りて此知己とは基督を指すのであると説く人があるが、甚しき牽強附會の説と云はなければならぬ。此箴言を題詞とし、親密、忠信に満ちた友情に就て話し、更に類比法により友たる基督に就て話すもよからう。併し此場合に於ては説教者自らの考で基督に聯想せしむるのであつて此題詞が基督に關係して居ると云ふのではない。

大切な事は如何なる題詞を取るに當りても、如何に容易く又明瞭でも、果して自分が是まで考へて居た様な意義の言葉であるか否かを精細に研究する習慣を造る事である。此の方法に依らば從來用ゐて居た數多の題詞を捨てなければなるまいが、之が爲め却て多くの題詞を發見することが出来やう。以上論じた様な從來の考を捨つれば更

に興味に富み有用な意義を其内に發見することが出來やう。又題詞を嚴密に解釋することは實際材料を減少する様であつても、自分の心に對し又神の言葉に對し誠實ならんが爲に敢て之を爲なければなるまい。併し實際に於ては嚴密な解釋の習慣を養ふは材料を減少するものでなくて、却て之を増加するのである。希伯來語又は希臘語を知つて居る人は原書によりて其題詞并に其聯絡を能く々々研究した後でなければ説教してはならぬ、其他の人は最良の聖書の譯本又は良き註解書を取り神の貴き言葉の一句たりとも自ら親しく又正直に之を研究したる上でなければ、斯く々々の意義を有する者であるなど、人に教を垂れぬと云ふ決心がなければならぬ。

第四節 題詞研究に關する注意

以上題詞解釋上誤謬を生ずる主因を論じ其數多の實例を示したが

進んで是より題詞を正當に解釋するに當然必要な原則を示すは適當のこと、思ふ。聖書解釋の事を論究した好著は多ければ、爰には二三の簡短な注意を與へるのみにしやう。解釋に關して我等が區別しなければならぬことは、一、説教の爲に題詞を研究すること、二、説教者が己が職分の一部として常に聖書を研究すること、三、説教の時題詞を通俗的に説明することである。勿論此事に就ては第六章第二節に詳く攻究する積であるから、爰には只説教者が説教の題詞として使用せんとする聖書の字句の意義を正確に捕ふるに當り其助となるべき注意を示すのみにしやう。是勿論苟も説教者たるものは、何人でも斯くなさゝる可からずと赤心より感ずる所のことであらう。説教者は註釋書、字典、文法書、談林其他之に類する書を用ふるに當りても、自分が採用する解釋は自分の物とならなければならぬ。換言すれば自分

が説教の内に展開し又述べんとする題詞の意義は、如何なる場合に於ても、其字句に關し自ら深く研究して得た見解、即ち熱誠なる思索と、勉強との結果でなければならぬ。斯る研究に當り有益と思ふ注意を左に規則体にして與へやう。

(一) 題詞を精細に研究せよ

題詞の文法并に修辭法に注意せよ。(イ)題詞中の字句の正確な意義を捕捉せんことを勉めよ。其等の語の中、特別な聖書特有の意義に使はれて居るものが無きか、又其特有の意義が此句節に適當であるか否かを尋ねよ。若し題詞に主要な言葉、又は特別に大切な言葉があらば、聖書字典の助により、他の場所に之と同一の言葉が如何に使用されて居るかを調べよ。希臘、希伯來の原語に通ずる人は原語の辭典を調べるに優つた事は無い。又聖書の異なる譯本を對照するも利益を受ける

ことが數々ある。外國語を読む人は他の國語にて其字句を調べれば、まゝ更に新しい思想を得ることがある。兎に角能ふ限り最良の註解書を調べよ。單に題詞に就てのみならず其教訓に就ても正確な意義を周到に調べよ。

題詞の文法上の研究は之を充分に爲さば其程良いことはない。ホイトリーは常に云ふた、『説教を書く前に先づ題詞を顯微鏡の下に置け』と。シュエツドは云ふた、『始め題詞を選び其眞意義を探り、且つ之を引出さんが爲、有らん限りの力を盡さば説教の組立其言葉遣などは誠に容易く成るものである。此點に勉るはあらゆる他の點に勞力を省くものである』と。

(ロ)題詞の中に、又は其前後の聯絡中に在る譬喩を特別に注意せよ。其場合の性質上、又前後の聯絡より若くは他の句節中に之と全く同一

な言葉を見出すに當り、之は譬喩であつて字句通りの意義ではないと云ふ事が明かな場合にはそのやうに解釋しなければならぬ。聖書の言語は、他のあらゆる國語に於けるが如く、ごちらかと云はゞ、字句通りの意義に隨ふべき場合が多い。其意義が倫理學上又は審美學上などの偏見や空想的の見解と合はないとか、未成品である科學的事實に基いた輕卒な推理に一致しないからと云つて之を譬喩的に説明し去るは神の啓示たる聖書を輕視することである。然れど聖書には明かに譬喩的なものが澤山ある。又聖書中其語が使はれて居る他の所を見て譬喩的のものと解かなければならぬ所もある。然れば其字句的の意義に基いて重大な説を立んとせば深く注意を施さなければならぬ。未來に關する預言などの時、此事は特に慎まなければならぬ。斯る事柄に就ては何時か預言の遂行さるゝ日に明かにならうが、夫迄は

字句的の意義と譬喩的の意義とを前以て判別する事は至て困難である。又記憶すべきは言語と云ふものは甚だ譬喩的であつても、必ずしも架空的でないことと云ふことである。故に先づ其譬喩は如何なる目的を以て使はれたかを確め、明瞭なる言葉で之を述べても其意義に間違は無いと云ふものを捕へんと勉めよ。例へば『消へざる火』と云ふ語は譬喩と呼ぶ事が出来やう。然し此確かな意義は火が肉體に及ぼす苦痛に酷似せるものが地獄にもあると云ふので、地獄の實在を説かんとせば、此地上の事物を取り如何に巧妙な譬喩を用ゐても到底云ひ盡すことは出来ぬ。

聖書の寓意的物語は特別に周到な注意と高尚な趣味とを以て研究しなければならぬ。或る句節が我等の空想と符合するからと云つて又は我等に都合よしと云つて、之は或精神的の教訓を寓意したものと

思つてはならぬ。斯く之を説明するに當ては充分な論據がなければならぬ。聖書に本來寓意的に使つてあるものならば勿論其様に解釋しなければならぬ。併し單に夫に似て居ると云ふだけにては、斯く解釋するは不注意の至りである。我等は靈的の事物に關する例を普通の歴史又は自然界より引くと同様に聖書の歴史、預言、箴言などの内より同種の例を取ることが出来る。けれども之を以て聖書の解釋であると主張する權利はない。ヨセフは或る點に於て基督に好く似て居つた。又其枯たる手を人々の前に掲げて其兄弟の爲に求めたアセナ人も同じ例に使うことが出来るやう。然るにヨセフの場合を取りて基督の例とすることが出来るからと云つて彼を基督の型であると云ふことが出来やうか。又利未記中の事物や、ヨシヤ、ダビデ、クロスの歴史、ソロモンの箴言、イザヤ書など何れも、普通の意義以外に基督に關する

寓意的の關係を持つて居ると云つて、此等の中に包含さるゝ一切の事が悉く基督に關係するものであると云はれやうか。此問題に關し極端に走るを避けなければならぬ。即ち聖書の中に明示されて居らない寓意的の意義を取りて説教の根據としてはならぬ。之に就て注意すべき事が二つある。一つは靈的意義を求むるに急なるの結果、其自然的意義なる神の攝理とか人間の義務など極めて肝要な教訓を全く忘るゝことがある。即ちヨセフを基督の型であると主張する人々は、ヨセフが迫害を蒙つても、一足飛に榮華の地位に達しても尙信仰に堅く立て動かざりしことゝか、極めて危険な誘惑に打勝つたことゝか、又彼が同族其他の人々を愛するに如何に切なりしことなど幾多の興味に満ち人を動かすに足る事柄を人に語ることを怠つて居る。次に自らの意義にのみ説明すべき多くの句節であつて靈的な事柄に關係さ

せても敢て差間がないものもあらう。即ち其内に含まるゝ原理又は夫より及ぼした類比などに基き、或る靈的の意義を加ふるも不可でない場合があらう。但此場合に於ては之を爲すの責任は説教者が自分に負はなければならぬ。

(二) 其前後の聯絡に従つて題詞を研究せよ。

題詞を能く了解するに缺く可からざる一事は題詞の前後に横はる思想を尋ねることである。直接の聯絡は題詞の前か後かの數節、又は數章の内に含まるゝものである。説教者は其聯絡を一通り知らなければならぬ。且つ其聯絡は其題詞が屬して居る其章に始り又其章に終るものと思ふ通弊に陥つてはならぬ。如何なる點迄其聯絡を辿るべきかは、其場合に從つて異つて居る。併し全く之を等閑に付して良いと云ふ題詞は殆んどない。可成は題詞並に其聯絡を調ふるに原語

を用ゐるか、又は己に述べた様な書籍の助を借るがよい。多くの場合に於ては題詞と其前後の文章との間に、言語上の面白い關係が存するのであるが、之は翻譯に由て全く消失することがある。原語では同一の語であつても翻譯では異つた語を用ゐることもある。論理上の聯絡を探るは題詞を充分に了解するに大切なるのみか尙又説教に適切な冒頭を作るに良い。

(三) 更に廣き聯絡を探り題詞を研究せよ。

正當な解釋を下さんとせば題詞に對して間接な聯絡を有するに過ぎぬものまでも知ることが甚だ大切である。之に就き注意すべきことは左の三ヶ條である。

(イ) 論理上の聯絡は時として題詞を取つた書卷全体に亘ることがある。希伯來書の句節又は羅馬書一章―十一章に至る迄の句節の如

きは、是等の書卷の全体の議論を念頭に置かなければ充分に之を了解するを得るものではない。勿論此事は聖書の大部分に於て皆然りと云ふ譯ではないが、各書卷は各々獨特の内容、聯絡、性質を備へて居る。聖書研究者に取りて、聖書の各卷を、全体の聯絡に注目して研究するは極めて大切なことである。斯くせば其全体との關係并に四圍の事に關し正確な智識を得、かくて與へられたる題詞を明細に研究することが出来るのである。

(ロ) 辯論の論理的聯絡以外に、又一通りの歴史的智識を有することも大切である。聖書の大部分を占めて居る物語などに於ては題詞に光明を放つ地理上の事實を絶へず觀察しなければならぬ。之と等しく猶太人并に聖書の内に現はるゝ他の國民の風俗習慣を知らなければならぬ。當今、題詞を了解せんとして此方面の助けを一心に求むる

人々は誠に少ない。又其題詞は何人に對して使はれたものであるかを尋ね、其人々の意見や心の有様なども推量せば大に得る所がある。又其語を記した人や、之を書いた人と、其語を受けた人々との關係をも念頭に置くことも必要である。之を爲すには前以て兩者の關係を知る許りでなく、尙其人々の間に如何なる誤謬又は罪惡が行はれて居つたか、其目的は如何なる點にあつたかを探らなければならぬ。此等の智識を得んとせば其書卷を繙かなければならぬ。又パウロ、ヤコブは各如何なる論理的又實踐的の誤謬を正さんとの目的を以て書いたかを知らば、義とせらるゝことに關し、パウロとヤコブが相容れぬと感ずることは毫もあるまい。猶太人間に行はれて居つた罪惡習慣などの事に就き、福音書に證する所、猶太人の著作、又近世の著書中之を論述せるものを繙かば基督が屢々直接に又は格別に猶太人の間に存する誤

謬や習慣などに關して如何なる態度を取り給ふかを學ぶことが出来る。例へば離婚、誓言、安息日、貢を納むる義務などに就き當時の人々の間に争論が如何程盛んであつたかを了解しなければ此等の消息の實際を充分に知得することは出来ぬ。最良の註釋書は此等の事に關して何等かの知識を與へよう。又他の例を取らば約翰傳六ノ四四にある「我を遣はし、父もし引かざれば人よく我に來るなし」と云ふ語は單に一般的の教訓として語られたのでなく尙又謙遜りて己が救を求むる人に云はれたのもなかつた、寧ろ至つて下等な動機を以て、即ち一種雷同的精神を以て、又勞せずして食を得んが爲に自ら彼の弟子なりと呼び、彼を押し立て、此世の王國を建設せしめんと計つた無賴漢に向つて云はれたる語である。斯る事を思ひ起すは基督の云はれた語の力を殺ぐものではなく、却て彼が其當時懷き給ひし特種の目的

を知るを得其教訓の眞意を窮むることが出来る。

(二) 聖書全体の教訓に反せず却て之に一致する様に解釋すべきこと。聖書の教訓は調和的のもので、之を一個の釣合の良い組立とすることが出来るものである。されば若し或る句が二ツの意義に取れ(組立か用語の曖昧な爲め)何方が適當な意味であるか了解に苦む時は、聖書全体の教訓に一致する方を取るがよい。我等の望通りの學說を立てやうとして、其詞の使用上又組立上許さぬ意味を無理に附加するは甚しき惡弊である。又文法上何方にも解釋さるゝ場合に於ては聖書全体の教訓に隨つて解釋するがよい。もし此原則を誤なく適用せんとせば、聖書の教訓に就て狹隘なる輕卒な見解を下すことなく、敬虔の念に充たされ、深く意を用ゐ、廣く聖書神學を研究しなければならぬ。

題詞を研究するに聖書の引照を注意して調べることは甚だ肝要で

ある。斯くせば同一の言語、同一の句が他の場所に如何なる風に使はれて居るかを見て文法上に益する所が多い。又同一の問題が異なる場合に如何なる様に表はされて居るかを知り、又其題詞として取つた言葉が如何なる事情の下に云はれたかを知らば大に益を受るのである。又斯くして其題詞の言葉は譬喩的に説明すべきものであるか、或は寓意的に解すべきものであるかなどの決定も出来やう。或は説教者が自分の見解を下すに當り註釋書や其他に重きを置かずに題詞の意義を取ることが出来やう。のみならず引照の句節は其問題の新しき方面とか證明とか例とか應用などを思ひ出させ、斯くして説教に必要な材料を供給することがある。青年説教者は其題詞に關係ある引照を調ぶるを定則として守らなければならぬ。日々聖書を讀むに當り引照に注意した爲め聖書に通曉するに至つた人々は實に多い。

第三章

説教題一分類

- 一、教理的の題
- 二、道徳的の題
- 三、歴史的の題
- 四、經驗的の題

説教を作るに題詞を先に選ぶべきか、又は題を先に定むべきかは、其場合に依る。聴衆の状態を慮り、又近頃の説教を調べて先づ或問題を決定し、夫れから題詞を發見しなければならぬ事もあらう。聖書を讀んで、或は題詞を書き抜いて置いた手帖を見て自分の心に感興を與へたものを探つて、之を基礎として題を定める事もあらう。何れの途を踏むもよいが、説教者の性質に應じざらるか一方に偏する傾がある。

題詞は説教の根本思想となり、又聖書の教訓を表はすものであるから、之を第一に論ずるは適當であらう。題詞の事に就ては既に論及したが尙注意すべき點を擧ぐれば

題を先に選ぶ場合には之に相當な且つ成べく其問題に正確に當符まる様な題詞を選ばなければならぬ。又題詞の方を先にする場合には、何か一定の問題を夫れより取らなければならぬ。必しも一個の命題を以て表はさるゝものでなくとも良いが、一個の問題でなければならぬ。題詞的説教若くは註釋的説教に於ても後に論ずる通り、問題に統一のあるが肝要。

説教の問題を分類して教理的、道德的、歴史的、及經驗的のものとする事が出来る。勿論斯る分類法は必然不完全で、一方に屬するものも多少他の範圍を侵す事もあらう、又人に由て其分類法も異つて居るが

此分類法は實際上便宜である。

第一節 教理的の題

教理的の説教と云ふは、其教派獨得の教理又は之に關する争論などのことをのみ論ずる説教のことである様に思ふ人もあるが、是は大なる誤謬である。教理を論ずるは教訓を爲すことで之は説教者第一の務である。真理は宗教の生命である、之なくんば活きた信仰を維持することは出来ぬ。人に真理を教へ、又既に人々の知れるものに新しき感興と勢力とを加ふるは説教者の大なる本分ではないか。罪、攝理、救等に就て聖書に記載さるゝ事實及真理は、苟も其説教を聖書的ならしめんとする人々の看過すべきことであらうか。斯の如き真理は我等の説教に各々孤立し錯雜して存すべきものではない、必ずや一定の形態を備へなければならぬ筈の者である。然るに聖書の教理とは聖書

の教全體の内から或る特別な問題に關する思想のみを集め來りて之を組織したものに過ぬ。説教者は先づ自ら教理に就て健全な思想を懐くのみか、尙會衆を導いて正當な思想を懐かしむることも大切である。當今の様に思想界は混亂の狀を呈し、宗教的事業が一日も動搖せざることなき時代に當り教理的の説教と云ふべきものは寔に少い。教會の説教の眞理にのみ多大の注意を拂ひ、其外形に關しては至つて不注意な時代もあつた。其當時聽衆を牽いたものは話ではなくて教理であつた。或程度迄は、其時代の趣味に應ずるも宜からう。何故と云はゞ斯る要求は數々實際の要求を表はして居るのであるから、社會は其方面の眞理を受け易い。併しもし其嗜好する所が明に誤て居らば之を矯正せんが爲に全力を盡さねばならぬ。教理的の眞理を聽衆に解り易く又面白く説く人は聽衆を導きて聖書の教理に通達せしめ

彼等を益すること實に多大と云はねばならぬ。教理的の説教と云つて必しも乾燥無味のものではない、實に教理を良く説いた説教は説教の内でも最も興味ある説教である。知を求め知りて喜ぶは人の常。詰まり如何なる様に之を述べるか、肝要である。乾燥無味な説教者は、どんな問題を捕へても乾燥無味たるを免かれぬ。ありふれた事柄を述べ、聞き慣れた勸めを爲す平凡な人は今日でも往々ある。

希くは殊に大教理を説教したいものである、是等の問題に關する説教はありふれた問題だといつても、必しも平凡に流るゝ必要はない。太陽の光は人類の祖先が樂園中に之を見た時と同じく、今日に於ても毎朝新しく見えるではないか。又年若き者の愛情の麗はしさや、親心を痛むる悲哀は毫も祖先の感じた所と異なつては居らぬ。されば福音の諸大教理は、尙も見える目あり聞ゆる耳ある人には、何時でも新し

いものである。如斯眞理を先づ自分から好んで求め更に人をして之を好愛せしむるは我等の務である。多くの説教者は云ふ、彼等の經驗少なき傳道の初期に當り、耳新しき問題を捕捉する能はず止を得ず悔改とか、新生とか、又之に類する題を取り、自ら詰らない説教であると思ふたものゝ結果は、却て自分で力あり良い説教であると思へたものゝ結果よりも實際良かつた事を發見することがある。勿論或る人々のやうに神の選定とか、バプテスマとか云ふ問題をいつも掲げて或る特別な教理を十八番としてはならぬ。又或る人は潔めとか、聖靈の證とか、基督の再臨とか、又之に類する、餘り人々が好んで聽かぬ教理を説教する場合、又神の選定とか、未來の刑罰とか、墮落とか、又外國傳道などに就て説教する場合は左の規則を遵奉すべきである。宜しく大膽忠實にして又巧妙、穩和なるべし。

大教理に就て度々説教をしなければならぬが、定住牧師たる者は斯る教理の全体を一つの説教で論ずるは善くない。斯る説教をなさば單に其問題を概括的に論ずるに過ぎざれば、聞く者に取りては了解が甚だ困難で、殊に極平凡に陥り易い。不馴な辯舌家や著者などが極く廣き問題を取らば、之に付て充分云ふべきことを發見するであらふと思ふは誤謬である。寧ろ或問題の一方面を取る方が却てよい。この方が新しい事を云ふによく、又其問題につき強き興味を聽衆に與ふることが出来る。アレキサンダー氏は學校に居る子供に次の様な手紙を送つた。『問題が狭ければ狭い程、其事柄に付て多く云ふことが出来る。然るに學生等はまるで反對に思つて居る故に、彼等は徳とか、名譽とか、自由とか、其他之に類する問題を掲ぐるが、却てモット狭い問題例へば、徳の樂み、武士の名譽、眞の自由と偽りの自由との差などと云ふ問

題を取り之に付て書く方は何程容易か知れない。されば一般の規則として問題を狭くする程、多量 of 思想を得るものである。之には哲學的の道理の存するを注意せられよ。それ知識を得るに當り頭腦は特種より一般に進むものである。ニュートンは林檎の落下するを見て重力と云ふ一般原理に達した。動物學者があらゆる割れた爪と角を有する動物は草食動物であると云ふ一般原理を發見するに先ち、特種の觀察を夥く積んだのである。……之れ取りも直さず概括である。然れば概括は最後に來るべきもの。故に概括的の問題即ち徳とか、名譽とか云ふ問題を論せんとせば豊富な知識と熟練したる頭腦とを持たなければならぬ。斯く特種の事柄から始むるが良い。此事は單に説教者の力量の上からばかり云ふのでなく、又聞く者の了解からも打算して云ふのである。若し辯士が一回の説教で大問題を十分に論じ

盡さんとすれば之を極く詳細の事に至るまで長々と論じなければ多數の聽衆は之を了解する事が出來なからう。のみならず定住牧師は一の説教の爲に夫れ程多量の材料を消費することが出来るものではない。併し數個の大問題に付て連続的の説教を爲す場合や又は或る教理に付て特別な興味が喚起された場合は勿論例外である。

凡そ何種の問題であつても、其問題相應な自然的區分があるものだから、この區分を捕へて其問題の特別な一方面的みを論ずることが出来る。例へば悔改と云ふ問題を取り、之を分ちて悔改の性質、悔改の必要、悔改の時期、悔改の證據、悔改と信仰との關係とし、或は新生を取りて、新生の性質、新生の必要、新生の主因、新生とバプテスマとの關係、新生と信仰との關係、其他之に類するものとするものが出來やう。此事柄又は教理的問題を掲げて説教するに當り、われらが常に記憶すべきは神

學的論文的講演と通俗的の説教とを明に區別することである。前者に必要な科學的分解精密な論理などは必ずしも後者に適當なものではない。組織的な頭腦を有する學生に取つて極興味ある部分は説教としては最も不適當であるかも知れぬ。神學者にわかりきつた事は普通の聽衆にわかつて居ると思ふことは出來ぬ。若い牧師が教理的の問題を至つて無味に論ずるは其説教が彼等が勉強したり書いたり、又聞たりした文章や講義に餘り似て居るからである。吾等は全く異つた點から見解を下さなければならぬ。即ち其教理の如何なる方面がよく普通の人々の興味を引起すに足るかを尋ぬると同時に其問題全體に正當な見解を與へんことを勉めなければならぬ。純教理的のものゝ辯舌的の論究との間には大切な差違があるのみか、問題の選擇、問題各部の配置などに關しても大に趣を異にして居る。

其教理の論理的分解に隨て題を定むることをせず、或る問題の一面のみを取るもよい。例へば悔改に關し、悔改の性質、悔改の結果、悔改の義務などに關し、それ相應の問題を求め、之に就て説教することも出來やう。又は悔改に關する題詞の内から何れかを選んで之に基いて説教することも出来る。例へば可六ノ十二、弟子等出で、人々に悔改むべき事を宣傳へを取り、悔改一般の事柄を論ずるもよし、又悔改の義務に就て論ずるもよい。徒五ノ三十一、神は之を君とし、救主として其右の方に擧ぐ之れイサラエルに悔改と罪の救を與へんが爲也、は悔改を基督の賜物と見て居る、又徒二十ノ廿一、神に對ては悔改め主イエスキリストに對ては信仰すべき事をユダヤ人またギリシヤ人に示せり、は悔改と信仰との關係を示して居る。又太三ノ十一、我は爾曹を悔改させんとて水を以て爾曹にバプテスマを授く、は悔改とバプテスマ

の關係を表はして居る。又悔改に至る有力な諸種の動機は左の題詞に含まれて居る。羅二ノ四「神の仁慈は爾を悔改に導く」路十三ノ三「爾曹悔改めずば皆同じく亡ぼさる可し」。徒十七ノ卅「神は今は何處の人にも皆悔改むることを命じ給ふなり、蓋は神すでに其立し所の人により義をもて世を鞠べき日を定め」。路十五ノ十「我爾曹に告げん如斯一人の罪ある人悔改めなば神の使の前に喜びあるべし」。太三ノ八「さらば悔改めに叶ふ實を結べよ」。以上の如き題詞は悔改に就て立派な話を作る材料を與ふるものである。悔改の教理に精通する人は之等の題詞一ツ々々に示されて居る教を説き、數回で此問題に關し完全な論究を盡すことが出来る。かゝる方法を執らば又一個々々の説教は特別な問題に屬するが故に活氣に富み斬新な所がある。

純然たる教理的説教の外に、護教的のものもある。護教とは基督教

證據論、并に基督教に反對な説を論破することである。ロバルト、ホールは或る人々が好んで此種類の問題を論ずるを大に非難して居る。此種の説教者は其説教により基督教に對する難問を人に知らしむるのみで其難問を解除する力量を欠くが爲め却て有害に終ることがある。氏は又基督教の眞理を證するは累積的のものであつて一遍の説教で論じ盡すことの出来るものではないと云ふて居る。

けれ共形式に依らず偶發的に基督教證據論を時々使用して有益ならしむることが出来やう。即ち或反駁の問題を掲げ之に堂々と反論を試むることをせず普通の説教の時に序がてら、又は行掛り上數言を之に費さば却て基督教の證據となるべき事を明かにし、又或特別な反對説を能く辯駁する事が出来やう。此方が人の心に潜む疑を取り去るに適當である、何故と云ふに普通の人々の精神上の要求、習慣は此

方法に適して居るからである。もし護教的の説教を爲すべき明白な理由あらば其全體に亘らず寧ろ其一部のみを捉へ其他の部分に關しては僅に數言を費すのみで、其方面にのみ全力を費した方が宜い。苟も堂々と論題を掲げた以上は充分之を論じなければならぬ。之に反してももし我等が十分に之を論じ盡さず單に著しき誤謬點や重大な反對說などを挙げたばかりではならぬ。誤謬と云ふ者は永く頭中に残るが、反駁にして不完全な者は忘れられて仕舞は世の常である。何故かと云はゞ誤謬は事物の連絡を逸したもので嶄然頭角を顯はして居るが故誤謬は却て深き印象を與ふる者である。護教者は眞理を人々に教ふるに當り周到の注意を以て彼等の誤謬が道より放れて居ると云ふことを示さなければならぬ。けれども之は一朝一夕に成就し得べき事ではない。實に深き學識と大なる才能とを要する事業である。

他派の基督者と教理上の爭論を爲すことも亦説教の問題となるが、之は信實と深き注意とを以てしなければならぬ。能く世の中に行はるゝ誤謬がある、即我等は基督者の間に存する誤謬を攻撃してはならないと云ふ考を持つて居る人もあるが、此人々は人間の信仰は道德上信仰上に欠點がなければ夫れで充分である、その眞理なると否とは問ふ所でないと考へてゐる様に見える。

第二節 道德的の題

我等は敬虔の念厚き人の口より道德的説教を甚く賤むる聲を聞くことがある。例へば十八世紀の英國教會、現今の亞米利加ユニテリアン教徒は贖罪又は聖靈の働きなどの事を無視し福音の代りに純然たる道德のみを談するが如き場合には此非難が當筈である。之が爲に多くの人々の頭に道德的の説教と云はゞ恩惠の教理と反對なものゝ様に

響くのである。併し主基督の教訓は重に道德に關する事であつた。又パウロ、ペテロの如きも信仰により恩恵によりて救はるべきことを論及すると共に單に正しき生涯を送るべき事を勧めた計りでなく、種種の些細な義務に關しても多くの教訓を施した。何人でも説教者たるものは信者に向つて其信仰を働きに現はし、神の聖きが如く自らの行を清くすべきを奨励するは勿論の事と思ふであらふ。説教者は福音を放れて道德を説てはならぬ。嚴格な意味に於て彼は福音的の動機以外の點から道德を教ふる事もあらうが、斯る時にも基督に敬愛の情を表はし又彼に事へんが爲に己を献げると云ふ大動機を第一としなければならぬ。我等は先づ神の律法を守る事を人々に勧めなければならぬ。斯て人々を基督に導く事が出来るのである。併しながら未信者に對して單に社會の利益の爲、社會の幸福の爲にのみ、又は子供

等を愛するが爲にのみ道德的生涯を送らなければならぬと論ずるは、極特別な場合を除く外、説教者の爲すべき事ではない。説教者は先づ基督の使者として人々に神と和らぐ可き事、又聖靈によりて生れ更るべき事の必要を主張しなければならぬ。又已に悔改た人々に對しては真正なる道德を守るは單に色々なる世俗的の理由に存するのみならず、救主なる神に對する大なる義務であると云ふ事を熱心に説かなければならぬ。どれだけ詳細に亘りて之を論すべきかと云ふことは大切な問題である。已に云つた通り主や使徒等は随分自由に詳細の事に迄説き及んで居る。我等の説教の欠點は基督教道德を一般的に論ずるのみであつて日常生活に當りて極手短な實踐的の事柄を實際的に論じない、即ち人々に實踐的の事柄を示し實際問題に關して人々の取るべき義務などを十分に論じないことである。實に是等の問題

と云ふものは無數で極めて複雑又困難なものであるから銳意之を選
擇しなければならぬ。

特別な道德に關する説教に注意すべき事がある。

(一) 吾等は極瑣末な事柄に關して形式的の議論をしてはならぬ。
例へば清潔とか、禮節とか、其他之に類する問題は之を口にして悪い事
はない、けれ共之は或る事の序に云ふべき事であつて、一個の説教の問
題となすべきものではない。特種の道德は退くべきものではないが、
些細な事は更に一般に亘る事柄又は歴史的の問題の内に入れた方が
宜しい。註解的説教の利益は其説教の教理的なると歴史的なること
に論なく形式立つた説教の内に云ふことの出来ない様な些細な道德
上の事に關して、何が有益な偶發的の注意を施す機會を與ふること
である。

(二) 次に道德を論ずると云つても、此事のみに時を費してはならぬ。
何故と云ふに我等の大切な勤は人を神と和がしめん事である。且此
恩惠の教理は信者をして良き働を全ふする爲に心を用ゐしめんが爲
めのものであるからである。

(三) 第三の事は道德上の種々の問題にのみ這入り、福音宣傳の事を
第二位に置いてはならぬ。

其外禁酒の事に關し或は遊技などの問題に關するが如き特種の道
徳的問題に就て説教するも極めて大切である。是等の事柄に付只數
言の注意を述べやう。説教者は決して極論に走つてはならぬ。物に
依りては其事自身に於ては左程罪でなくとも外の人々の爲に之を控
へた方が良い物もある。是れ人々の意見に差異の生ずる所である。
是等の事に關して熱心に攻撃するに當りても、我等は無辨別であつて

はならぬ。若し我等が造酒、舞踏、諸種の競技、興業物などは其性質上有害なるもので如何なる場合にも之は悪しきものであると主張せば、寧ろ極端な又誤れる基礎に立つのであるから之は我等に執りて喜ぶべき立場ではない。若し是等の事に關して餘り極端に八ヶ間敷言は、却て人を福音より遠ける事がある。此世界は我等の悲と憤慨に堪へない恐しき大罪惡に充ちて居る。我等は之を矯正せんが爲に大に奮はなければならぬ。又我等は單に惡を責むるに非ずして正しき事を奨励しなければならぬ。如斯問題を論ずる説教の通弊は單に猛烈たる攻撃を之に加ふるに過ぎないと云ふ點にある。之に反し若し我等は人々に正しき方向を執らしめん爲に奨励を與へ、彼等が避く可き罪惡を知らしめんが爲に同情を施さば更に大なる効果を奏することが出來やう。勿論後者は大言壯語を恣にする所謂雄辯を振ふ時機とは

ならないかも知れぬが、夫れだからと云ふて其價值に於て劣つて居ると云ふことは出來まい。嚴しく戒むる事は時には必要であらうけれども、正しきことを奨励するは更に有力なる事で又必要な事である。(提後四ノ二、汝道を宣べ傳ふ可し時を得るも時を得ざるも勵みて之を勉め諸の忍と教をもて人を正し戒め勸む可し)。最後に、是等の問題を論ずる時は、特別な説教を之が爲にするのではなく、普通の説教の時に、是等の問題を論じた方が一層宜しい。特別に、是等の問題に就て、連續的の説教をするならば聽衆を得る事が出來るかも知れない。若し夫のみが目的ならばそれも宜しからうが、更に大切な目的がある。且又形式的に之を論ずる時には批評を誘致し、反對を喚起するものであつて、假令充分道理が積んで居つても此種の人々を悔改しむる事は困難なものである。されば寧ろ普通の場合に於ては、是等の問題に就て言ふべき機會が起つた其度毎に之を論じ、又之を警醒すれば人に不愉快な感情

を與へず、又忍耐を以て之れに當らば漸次多くの人々を感化すること
 が出来る。説教者たるものは何か特別な罪惡或は社會的惡習などを
 論ずることを十八番としてはならぬ。斯る習慣を有する説教者は人
 々に嘲弄を以て迎へらるゝのである。

第三節 歴史的の題

歴史は之を讀む總ての人を引付け、且注意を以て之を讀む人に様々
 な教訓を與へると云ふことは別に喋々する必要もない。歴史の内
 も最も教訓的なのは聖書の歴史である。歴史哲學の大家シュレゲル
 氏は聖書の内にあるとあらゆる出來事が統一的に組織されて居るを
 見ては、到底攝理の存在を承認せざれば歴史哲學は構成されることは
 出來ぬと云ふて居る。聖書を學ばば世界の事物は我等の悟性の判斷
 にのみ由て説明し得べきものではない、曖昧で一見相反するが如く見

ゆるものゝうちにも攝理の大能は同時に働いて居ると云ふことを明
 かに悟るのである。されば聖書歴史は、世界歴史が提供する諸問題を
 如何に論すべきかを我等に示して居る。屢々引用さるゝ『歴史は實
 例によりて教へられた哲學なり』と云ふ語は、神が實例に由りて教へ
 給へる聖書に適用して更に切實なるを認めるのである。

且又人物程我等に興味を與ふるものはない。無生物、若くは概括的
 な命題などは之を人視するか又は何か人に屬する興味を之に加へな
 ければ之を以て普通一般の人々を動かすことは出來ぬ。されば自然
 を愛する詩人は自然と交ること猶人と交るが如く感ずるのである。
 又哲學の如き抽象的のものでも通例は或る人物に連絡させて記憶し
 て居る。慈善事業に人の注目を惹かんとせば誰か信用あり名譽ある
 人と之を連絡させなければならぬ。ジョン・ロールドは博く歴史に關

して講じた人であつたが、一日談話のうちに斯う云ふた事がある。「普通の聴衆に興味を興へんとせば單に歴史上の事柄や年代や又は教訓を語るのみでなく、どうしても是等の事柄を或る人物と聯絡させなければならぬ」と。偕て聖書は歴史から成り立ち、且つ其歴史の大部分は實際傳記から出來て居る。此傳記は個人の生涯の話などであつて、男女あり賢愚あり、又社會の様々な境遇にある人々の性格に就て千差萬別なる教訓的な實例を示して居る。且此歴史的の人物は皆一大人物の周圍に群集し、希望を以て之を眺むるあり、愛を以て之に親むあり、或は彼に近づくを欲せず敵意を挟みつゝ、傍觀するもある。

以上論じたるが如くなれば當今實際行はるゝよりも更に屢々歴史的の問題を説かなければなるまい。さて人々が此種の問題に就て比較的怠り勝なる理由は色々ある。先づ熱心な大多數の牧師等は聖

書歴史の内にも人間的分子の存する事を看過して居る。之必ずしも彼等は聖書歴史の内に「基督の型」となるべき者を見出さんとの熱情のみに驅られ、之に關係のない事物や人物などを顧みないと云ふ譯のみでもなからうが、兎に角是等の歴史的の事實を歴史として研究する事を怠つて居る。されば此人々がイスラエルの歴史的の事實を研究するに當つては、他の國民の歴史を研究すると同一の方法で進歩の順序を辿りはせぬ。希くは時々奇蹟的の干渉の事實をも認めつゝ、イスラエルの事蹟の綾なしたる織物の内に攝理の糸筋を辿らしめてよ。此等の人々は神の靈感を受けた人々の性格、動機などを分解するに、我等と同じ情の人であり、我等と等しく其弱點や簇り來る誘惑と戦ふた人であると云ふ事を悟らぬ。且又彼等は最大價値の模範で、又同時に我等の救主たる光榮に充てる中心的人格、即ち基督の純潔な人性に就て思考

するを憚つて居る。他の理由は又聖書地理や猶太人并に之に關係ある國々の風俗習慣や、又は聖書の事蹟と關係を有する普通歴史の智識を持つて居らぬと云ことである。若し是等の智識があらば、其光景を明瞭に且つ活きた様に描き以て聽衆の想像を燃す事が出来やう。又此人々は苟も説教者たる者が大に勉めなければならぬ筈な叙述の力に乏しい。之に反し或人々は歴史的問題を捉へ單に己が叙述的の才能を誇示し、又は己が有する古物學の智識を人に知らしむる好機會のみ考へ、必要な教訓を目的とせざるが故に、多數の聽衆の頭腦に歴史的説教と云は、直に美はしき修辭に過ぎぬと云ふ感を懐かしむるのみである。更に又説教者でありながら叙述の才能を自ら持つて居らぬを認め或は自ら斯く想像して居る人々は、歴史的説教の大切なる利益は叙述と云ふ事よりも寧ろ其人物や其人物の動機を分解するに由

りて得らるゝものであると云ふことを忘れて居る。聖書に記さるゝ實例中、隠す所なく人心最奥の動機、有の儘な性格が赤裸に我等の目前に廣げられて居るを見るは人を知り又己を知るに極めて有力である。有力な人々でありながら叙述の才能がないと云つて歴史的問題を採つた事のなかつた者が、一度聖書的人物、又聖書の舞臺に活動する人物の性格や動機などを分解する事の極めて大切なるを認めた以來、大に歴史的問題に興味を拂ふ様に成り、所々に美はしき叙述を施して成效するに至つた實例も多い。

聖書以外、基督教の創立より今日に至る迄の歴史は説教に多くの有益で教訓的な材料を供給して居る。さればとて之を基として説教の題を取る事はよくなからう。オーガステン、カルヴァイン、ウエスレー、ブルラー、ホール、チャドソンなどの傳記や人物に關する説教は甚だ有益

であるかも知れないが、注意しなければ羅馬教徒が聖徒等を尊敬し、聖書の教訓の代りに聖徒の功徳を喋々するやうになつてはならぬ。併し時としては日曜日以外の夜の集會に講演として教訓的な基督教的大人物特に敬ふべき宣教師等の傳記などを話す事はよからう。

第四節 經驗的の題

歴史的説教題には教理的の要素と道德的の要素とを含んで居る。然れども是等の問題は實際全く違つた性質の者である。之と同様、經驗的の題には道德的、教理的、又歴史的の要素をも含んで居るが、其性質上全く異つて居るから別に類を分ち之に特別な講究を施さう。福音を信じ之を生命とする人々の實驗を説教の材料に用ゐてよい。併し之を爲すには必ず聖書の教理、聖書の實例などを基礎として説かなければならぬ。勿論斯の如き事柄は教理的、道德的、歴史的の問題を論ずる場

合に於ても其材料の大部分を占める事がある。けれども宗教的實驗の特長を捕へ來り、特別の注意を此點に加へて論及することが出來やう。此目的を達する爲め説教の材料を或は聖書から、或は此種の問題を論じてある著書から、或は傳記から、或は説教者自身の實驗から取る事が出來やう。又豊富な宗教的實驗を有する基督者と時々談話を交へるも利益があらう。勿論之を爲す時は、其人々の氣質とか、神學上の見解とか、修養の程度などを斟酌しなければならぬ。説教者は醫師と同様、書籍から學ぶばかりでなく、實地に當りて一個々々の場合を研究しなければならぬ。

時には宗教を信じない人々の日常生活の有様を描く事もよいが、之を爲す時は其事柄を強て奇抜にしやうとして其人の善意や眞情や其他之に類するものを見逃してはならぬ、只有の儘に其人の有様を描く

可きである。思慮ある信者に其人々の追想などを念を入れて尋ね、更に之を研究し、之を謙遜に又有益に論ずる事が出来やう。罪の自覺又は自覺に達する種々なる方法、或は此自覺を妨げ若しくば之を失はしめた原因などを説くもよからう。悔改に就ても同様である。悔改の事跡は其人の氣質、宗教的教育の異なるに従つて各違つて居るものであるが、是等の事を丁寧に分解し、普遍的なものと特殊なものとを區別して、話さば必ず面白く又大に有益であらう。初代のバプテスト説教者が米國の北部から南部迄遙る々々と旅行を続け墮落、贖罪、新生等に就き無學で頑固な人々に説教した時は銘々自分の實驗を語つて大なる感動と多大の教訓とを與へたのであつた。又基督者の生涯に浮沈する其他様々な實驗、即ち基督教徒の苦痛、退歩と進歩、失望と希望、病氣と死別などの事柄は、度々福音的の講壇より論すべきである。自分の實

驗を語る時は特別に祈と謙遜と柔和とを以て話さなければならぬ。さもなくば己が品格を傷け氣六ヶ敷聴衆の非難を受けるかも知れぬ。之が爲め多くの人々は自分の實驗を語るを憚つて居る。時には又他の極端に走り、餘り自分の實驗を語り過ぎる人も少なくない。ごちらかと云はゞ、前者よりも後者の方が却て害毒を流すものである。此事柄に關しては中庸を得んが爲め熱誠を盡して勉めなければならぬ。使徒パウロは度々自分の悔改、困難、苦痛、安慰を始めとし現在の目的、將來の希望などに就て随分多くの言を費して居る。詩篇は殆んど全體、信仰の實驗を書いたものである。自分の實驗を語る時は、餘り度々同一の事を繰返したり、又餘り度々自分の事を云ふてはならぬ。我等は虚榮心に驅られて之を話すのでなく、其問題に適當なもの、又聴衆に有益なもの、のみを意を用ゐて選ばねばならぬ。又自分の宗教上の經驗

を語るに當り、又一般に宗教的經驗を語るに當り、特に注意しなければならぬ一の事がある。それは凡の實驗は皆自分のものと同様なものでないければならぬと想像したり、そんな風に聞かると、様に語つてはならぬ。クリソストムは子供の時から敬虔の風を有し常に道德的人であつたから、人間は受けんと望む丈の恵を受くことが出来るものであると教へた。之に反しオーガステンは至つて罪惡に染んだ人で其悔改の様も極めて激烈であつたから、神の主權と不可抗的の恩恵とを説いた。説教者又は信者にして急劇なる悔改の實驗を有する人は何時でも悔改は急劇なるものであると考へて居る。又他の人々は極めて緩慢に漸次的に悔改を實驗したるが故に他人に語る時も矢張其様に教へた。斯く或は希望に充たさるゝ人、或は失望なる人、或は確信に充てる人、或は度々疑の雲に蔽はるゝ人は、矢張各相應に説くのであ

る。基督教信者の實驗は猶人の顔と同様全く同じな人は二人とない。大體の特徴は何時でも同様であるけれども、數々多くの著しき差違の存するものであると云ふ事を忘れてはならぬ。

第四章

特別な場合の説教

- 一、葬式説教。
- 二、學校又は記念會などに於ける説教。
- 三、特別傳道説教。
- 四、子供に對する説教。
- 五、其他の人々に對する説教。

爰に特別な場合の説教に就て二三の注意を與ふるは便利である。何故と云ふに説教者が問題を選び、且つ之を論ずるに當りては、宜く特別な機會、又は聽衆の特別な性質などの要求に應じてそれ々々斟酌しなければなるまい。材料、排列、體裁等は後章に於て充分に研究するが其前に特別な説教の體裁并に遣方に就て少しく述べやう。

第一節 葬式説教

近來都市若しくは他の地方に於て、宗教的集會の時間を短縮せんとする傾向があるが爲め、又は何か他の理由に基き、或る説教者は葬式で説教するを辭するに至つた。又信者の方でも集りを短くし簡短な記念演説又は特別な場合には數人の演説を好む様に見える。けれども多くの地方に於ては今日も尙特別な葬式説教を好んで居る。説教者は此要求に應ずる爲め適當な方法を知らなければならぬ。

葬式説教に對し、種々の缺點を掲げ激烈に反對する人々でも自分の親戚とか朋友とか、眠つた時には思はずも其人々の心は之を求め、是迄盛に反對した説教者の爲す事を好んで迎へることも稀有ではない。悲に滿ち其心柔和な状態にあれば人は神の特別な恩恵を感ずるものであるから、説教者は喜んで此機會を利用し慰めの福音を告げ、又我等

が何時生死の境に出入するも充分な準備を爲さん爲信仰の生涯に這入るの必要を感じしむべきである。如斯場合には説教を常に聞く人は更に説教の意義を了解し得べき精神状態に在り、又稀に禮拜に列なる人々も其席に居るに由て、葬式の説教に於て人生の行路を明瞭に指摘し、穩かに人を救主に導くは誠に大切である。のみならず我等の悲がまだ新なるにより不知不識死者に對する讃辭を並べたり、人も亦之を聞くを喜ぶものである。何れの國にても言葉に依り、歌に依り、或は其他の方法に依りて此欲求を満足しやうとして居る。我等は基督敎の牧師として此務を盡すことを人々に望まれて居る。常に牧師などに敬意を表さない人々でも斯云ふ時はよく來て頼む。之は詰り牧師の勢力を示すものであるから、此勢力を善き目的の爲に使はなければならぬ。然れど説教者が注意しなければならぬ事は、自分は死者を

徒に賞讃するのではない、只福音を述べ傳へる務の中に此事を附屬せるのみと云ふことである。然れば死者に對する言葉は説教者が云ふ一部分に過ぎぬ。且其云ふ所は死者の事に關し知れる事を悉く云ふ必要はない。なせと云ふに斯くせば却て苦痛を催す様な事もあらう。己が心の中に悲が満て居るが爲、或は他の人々が感情に走つて居る事を考へる爲、過分に賞讃の言を發する事が能くあるが、之は良くない。若し死者が基督信者であれば重に其事實を語り、自ら知る所又他の人々が認めて模範とするに足るべき其人の性格又は生涯中に起つた或事を述べるがよい。又死者が基督信者でない場合は其人の友人に特別にほめられて居つた事柄などに關し二三の慰めを語るが宜からう。併し之を爲すに當りては誇大にしてはならぬ。けれども死者の品格が善良であつたから來世の希望もあらうなどと云ふべき筈の者では

ない。或る説教者等は斯る場合に彼等が常に説く所とまるで反對な事を云ふて居る。即ち新に生るゝ事なくも、善良な人は神の國を見る事が出来ること云ふ様な感じを人に與へる。其人々は云ふ。「此人は宗教を信じなかつたけれども斯く々々の人であつたから、之は神の恩恵に任せ奉るべき者である」とか、「彼は是迄基督信者とは成らなかつたけれども喜んで死に就いた人である」などと云つて恰も此事が何等かの證明とでもなりそうな言を發するのである。若し死者が悔改の徴を遺さず又基督を信する人でなかつたならば、其人の來世に關しては何事をも決して言てはならぬ。何故と云ふに斯の如き事を云はば無智な者思慮淺き者に猥りなる希望を懐かしめ、又正しき心を有する會葬者を欺くに至るのである。死に際して悔改た事などを大袈裟に語らば生存中に悔改る事をせず出来るだけ悔改を遅延せんとする念

を増長さするに過ぎないのである。概言すれば死者に關しては言葉少く語つた方が良い。又悪しき人の場合には寧ろ其人に關して何事をも言はぬ方が高尚な趣味に適し且つ其人に對して深切な道であらう。青年説教者等は始めて葬式説教を爲すに當り、何等の據り所もなきに大した讃辭を呈する事がある。斯る人は後で之を爲す事が甚だ苦痛に堪なくなり又之を爲さば眞理の前に重大な害毒を流すと云ふ事を知りつゝも、之をしなければならぬ苦境に陥るものである。多くの後の苦を避けるには始を慎むに限る。

斯る場合に於ける集會殊に説教は餘り長くなり勝である。葬式説教の通弊は、其場合に何等密接の關係もない觀念や眞理などに餘り多くの時間を費すと云ふ事である。寧ろ範圍を狭くし其場合に誰でも適切であると思ふ特別な思想のみを語つた方が良い。或る地方に行

はるゝ通り、葬式に於て盛に外觀を張ると云ふ傾向は少なからぬ害毒を醸すに由て宜しく之を矯めなければならぬ。

第二節 學校又は記念會などに於ける説教

學校又は文學會などに臨んでする説教は時々大なる謬見に陥つて居る。説教者は思ふ斯る時には普通な福音的説教でなく、何か高尚な博學めいた、又は哲學的なことを論じなければなるまいと。如斯場合には寧ろ純福音的問題を取り福音の真髓を説いた方が宜しい。科學や哲學は此場合の聽衆即ち教職員生徒の日々の課業であるから、今日^よは平日と異つた物を説教者より聽き度いと思つて居るのである。宗教に冷淡な人でも説教者が福音を説くを聞いてふさわしき事と考へ、又信仰の篤い人々は亦自分の友人でまだ悔改めてゐない人々が此處に在るから、どうか説教者が極實際的に、又熱誠に全力を注いで救に

至るべき真理を話して呉れゝば良いと望んで居る。勿論斯る説教は犀利で、有力で、又斬新な者でなければならぬ。其場合が場合であるから例證や体裁などには多少斟酌を施さなければなるまい。併し何處迄も基督に充ち、人々の靈を救はんが爲祈に満ちた熱誠の溢れて居る説教でなければならぬ。實に説教者は智識に富める青年數百の面前に立つに當り、同情と愛に満たされ感極まらざるを得ない―是等の青年が惡にあれ善にあれ此世に於て如何に大なる力となるべきかを考へ、且己が説教を聞かん爲此人々が神の前にかく嚴肅に構へて居るを見るに當り、説教者は一種云ふ可からざる感を催し、己が責任の大なるを思ふて尊嚴の念禁する事が出來まい。實に此の如き時に當りてはパキスターの言へるが如く『我は死なんとする者が死なんとする人々に話すが如く、之が説教の最後であると考へて説教をした』と言ふ

事の誠なるを感ぜざるを得ない。

説教者は又時々種々な記念會に招かれて説教する事もある。一般に云はゞ、若し斯る場合の説教が福音の精髓に満ちて居らば、熱心な人々の歓迎を受くる之に勝るはなし、又人を益すること之に過るはなからう。例へば部會、年會、其他の宗教的團體に於て説教する時には高尚に聞えたり哲學的な仰山なものでなく、福音の眞理、福音的の動機を熱心に直截に又感動を與ふる様に語り、以て深き宗教的感情を惹起しなければならぬ。如斯時に自分を人に示すを、祈りに由りて避け、只誠實に兄弟を基督に導かんと努むる人は識者と云はねばならぬ。若し又歴史的、教理的、記念的其他の特別な題を先方より望まるとあることも説教者は信仰的情緒を喚起せん事を專一としなければならぬ。

他の記念説教にも同一原理を常箝める事が出来る。時には或る宗

教的若くは慈善的團體が記念式を擧ぐるに當り説教を請ふ事があらう。牧師は説教のみならず其他の立居振舞に於ても斯る場合の儀式にふさわしくあるのみならず、嚴格を維持し靈的感化を人に與へん事を常に心に止めなければならぬ。如斯場合に説教者は常に教會に餘り出入しない人々、外の時に到底會ふ事の出来ない人々に面會する好機會を與へるものであるから、此機會を巧みに利用することに意を注がば、以て聽衆の心を引き付け、又彼の徳を立てることが出来やう。説教者は單に其行列の先導となるを以て足れりと思はず、熱誠を盡して人の靈を動かすものとならなければならぬ。

第三節 特別傳道説教

傳道説教と云ふは詰まり特別傳道説教會を開き未信者の心を叩いて悔改に至らしめん事を第一の目的とする説教を云ふのである。勿

論斯る機會に於ける説教とて普通の説教の取扱と全く異て居ると云ふ譯ではない。けれども連夜説教の爲問題の選擇や、又論究法の詳細に關して、いくらか違ふ所がある。或時には牧師が自分で特別傳道説教會を催す事があるが之は實に望ましき事である。又他の教會を牧する兄弟の招を受け連夜説教會の補助を乞はるゝ事もあらう。是等の場合に通例は一日一回の説教をするのであるが、又時々二回することもある。されば問題の選擇、又其問題の順序、論究の方法などは至つて大切なものであつて、又随分六ヶ敷事である。傳道説教の機會は様々あり、其時々々の要求も違つて居るから、あらゆる場合に當嵌る様な規則を作る事は到底出來ない、けれども特別傳道説教の一般の性質并に取扱に關し左に二三の實際的注意を施すは經驗の少ない説教者に對して有益であらうと思ふ。

(一) 斯る折の説教は簡短なるべき事。聽衆は連夜の集りに來るのであるから疲れを感じるのである。又單に説教の集りばかりでなく歌の集りとか、祈禱會とか、第二の會などと云ふものがあるが故に、平常通り長く説教をするは間違つて居る、他の點に成効して居る傳道説教者であつても此點に於ては間違つて居る。

(二) 其性質並に内容に變化あるべき事。單調の結果は良くない。是等の特別集會に集る人々は通例様々なる種類の人々であるから、全力を注いで或人々を救はんが爲に種々な方面から色々な人々に當嵌まる様に説かなければならぬ。之を爲すには論究すべき問題の選擇、又その取扱が大切である。或時は信仰ある信者を勵まし彼等を慰め、彼等の徳を建てる事を勉め、又時には冷淡にして怠り勝な會員、其人々の虚榮心並に矛盾せる生涯は福音の傳播に障害を與へて居る事を責め

なければならぬ。斯る場合には罪に對する主の審判の恐るべき事を明に公言し、又は躊躇せる者を勵まし神の計る可からざる愛と恩恵を示す事に由りて穩かに導かなければならぬ。説教者は或人に對しては議論を爲し、或人に對しては獨斷的に語り、或人に對しては柔さしき逸話や感情的の訴を爲して心を動かさなければならぬ。又或人に對しては良心に突撃を與へ其罪を責めなければならぬ。又或人々に對しては奨勵と忍耐強き勸めに由りて主の約束を試さん事を説かなければならぬ。特別傳道説教に於て大切なる者は以上の變化の外に尙在る。

(三) 通例一定の順序を履んで話すべき事。此順序は如何なるものであるかは其場合の異なるに従つて定めなければならぬから、あらゆる場合に當嵌る様な一般的の規則を作る事は不可能であつて、例外は規

則よりも更に大切なる事があるかも知れぬ。同一の順序を異なる場所に於て再び踏むことも、又は同一場所に於て、別の時に同一の順序に従ふと云ふ事も出来ない事がある。併し一方説教者の考を論理的に働かしめ且其説教の効果を良くする爲め、又他方聽衆の心に連續せる思想を印象せんが爲に、特別傳道説教に論ずる諸問題の順序を整理するは好ましい事である。次の順序は先づ普通のものである。

第一、教會に對する説教、即ち更に活潑なる靈的生活を爲さん事を勸め世俗的のものを警戒し、信仰篤きものを勵まし、他人の救の爲に祈禱の精神と熱心に盡すの情とを燃す事。

第二、會衆の爲に神の法律の恐るべき事を話し、良心を探ぐり、罪の意識を覺醒し、審判の恐れ、救主の必要を切實に感せしむる事。

第三、神の子の福音に現はるゝ神の恩恵と愛、悔改と信仰とをもて

罪の赦を求むるものに神は必ず赦を充分に與へ賜ふものなる事を説き、最後に直に決心を爲し基督を公に言ひ表はして福音を承認すべきことを以てするのである。其順序は何を前にするとも、以上に掲げた様な問題は、何れも特別傳道の説教題に必要なもので、此内から省いてよいものは無い。其内のあるものは勿論同一説教の内に結合してもよい。又異つた聯絡に於て度々繰返すもよい。又一方を熱心に説く時其序に他の方をも深く感せしむる事が出来やう。福音の或る一方面のみを説いて他の方面を少しも顧みないと云ふ事は甚だ大なる誤謬である。特に甚しきは最後の事即ち直に心を決して基督を言ひ表はすべき義務の事などを説かない人もある。或人は又始めから此事を取り上げ、其問題上當然、夫れに先つ所のものを後にして、どの集りに於ても此事ばかりを主張する人もある。之れが爲多くの皮相的な

思想を有する聴衆は罪の自覺を持たず、救主の必要を深く感せず、従て聖書的の健全な改心を味はないうちに早や信者の列に加はるに至るは惜むべき事である。次に特別傳道説教に必要なものは

(四)徹頭徹尾健全な福音的説教でなければならぬ事。特別傳道説教と呼ぶるゝ者の内に悲むべき程此性質の缺乏して居る者が多い。單に人氣を取らんが爲に奇矯で野卑な滑稽、粗暴な駁撃、極端で平衡を失つた言論、半真理にして半誤謬なるものを説くが如きは、所謂福音的傳道と呼ぶるゝものゝ大部分を占めて居るは嘆すべき事である。當今特別傳道説教として正に必要なものは罪、審判、贖罪、赦、新生、恩恵、悔改、信仰などの大問題に就て純然たる聖書の真理を熱誠と愛とを以て、又同時に忠實に力強く説く事である。

第四節 子供に對する説教

子供並に青年の爲に働くは現代基督教事業の一大特徴である。されば子供に對する説教に就て數言を費すも不當ではなからう。此問題に就て與へる注意は、日曜學校とか、又記念會とか、其他之に類する場合に彼等に話す普通の話にも適用することが出來やう。子供等に對する説教と、彼等に對する普通の話との間に存する體裁調子などの差は餘り多い。説教が、も少し通俗的となり又話が、も少し嚴格を保たば一方に對する注意は他方にも當嵌まる。

子供の話に成效する人の實に少數なるは誰でも認めて居る。併し多數の説教者は従來自分が經驗して居るよりも、此點に就て更に大なる力を持って居る。然るに何故此人々が子供の話に長じて居らぬかと云ふに、此問題に就て多くの思想も觀察も積まず又意を用ゐた練習をも重ねた事がないからである。初め自分等は子供に話す才能を持って

居らないと思ひ込み、比較的失敗を此部門の働に取つた人でありながら、後になつて此種類の説教に甚だ達者になり大に成效した人の例は澤山ある。勿論初めから子供の説教に大に成效した人もある。近世に於て最も著名なる一人は佛蘭西のカソリック教會の説教者なるマツシロンであるが、此人はルイ十五世が九歳であつた時に説教をしたと云ふ事である。又英國に於けるラツグビー學校の有名なる教師であつたドクトル、トーマス、アーノルドは子供の説教に大に成效した人である。其後英國の多數の説教者は此事業の爲に特別な注意を拂ふた。米國に於ては牧師又は傳道者中此方面に貢献した人々も少なくはない。特に掲ぐ可きはファイラデルフィアのドクトル、リチャード、ニユートン氏である。此人の子供に對する説教集は恐らくは此種類のもの、最良な物であらうが子供の説教に成效せんと思ふ人は必ず一

讀すべきものである。

幼少の子供は想像力に富み、十二歳頃の子供は記憶に富んで居るが、更に成長するに従つて抽象及び理性の力が活動するものと認められて居る。爰に論ずるのは第一第二の種類のものであれば、先づ抽象的の命辭や理論の形式などを避くるが當然である。多くの説教者が感ずる困難は此點である。何故と云ふに餘り抽象的で又純然たる議論に依りて福音の教理を説く事に慣れて居るからである。されば子供に説教をする術を學ば、更に有効な説教者と成るに相違ない。左ればとて只長い言葉を使はないから夫れで宜いと云ふ譯ではない。子供等は長い言葉であつても、具體的な、又聞き慣れて居る言葉であつて容易く了解する概念を表はすものならば、簡短なる言葉を解すると異なる事はない。加之十二三歳の子供等は説教者が特更に自分々に對

して短い言葉を用ゐるを悟らば侮辱を受けた様な感じを起して喜ばないものである。抽象的の語を省き、議論に據らず、權威を以て事實と眞理とを確實に述べるがよい。之を叙述し説明するに當り想像を燃すことを勉なければならぬ。其例として使ふものは物語風のもので一般に宜しい。又説教や話などは繪畫的なものが良い。けれども餘り綿密に描いてはならぬ。何故と云ふに餘り綿密なものは子供が厭く。されば梗概、特徴、又時々暗示的の叙述を活潑に施さば充分である。子供等が面白い事、又大切な眞理であると思ふ事柄を想像を燃す様に話さば我等は子供等の愛情を動かし、又良心に切入る事が出來やう。之を容易に爲さんとせば想像力に訴へるより外に途はない。

子供に説教する時、通例三ツの事を怠つてはならぬ。即ち面白がらしむる事、教へる事、感動させる事である。子供等を喜ばしむる事なけ

れば幾何話しても無益である。大人は左程面白く無い事にも注意を拂ふ事が出来やうが、子供等は之をしない、恐らくは之が出来ないのであらう。彼等を面白がらしめんが爲には組立並に言葉遣が明でなければならぬ。即ち子供等が了解するものでなければならぬ。子供等の極く好む言葉は「奇麗」と「面白い」と云ふ言葉である。子供等の思想は此二ツの言葉を中心として成立て居る。されば唯或る點に於てのみ奇麗な物或は面白い物ならば、直に是等の言葉を以て表はすのである。されば子供等を喜ばしめんには美はしき事、又面白きことを充分に利用しなければならぬ。けれどもごちらも度を過してはならぬ。又子供等に對する説教は必ず子供らしき心に深く感動する様な例を擧げて教へなければならぬ。之は宗教の根本問題なる罪、贖罪、悔改、信仰に關しても亦は倫理の基なる勇氣、正直、清潔、無私、勤勉、敬虔などに關して

も同様である。又宗教上の眞理を子供等に深く感動せしめんとすれば、普通彼等の恐怖心に訴へるよりも彼等の愛情に訴へる事を勉めなければならぬ。吾等の努は子供等を恐怖せしめんが爲に非ず、彼等を悔改めしめんが爲である。併し神の怒りとか審判などの事に關して適當な方法を用ゐて話す事を忘れてはならぬ。子供に銘々何事かを學んで居ると云ふ感を起さしめ、又我等は彼等の爲を圖つて教へて居るのであると云ふ事を悟らしめなければならぬ。如何に思慮なく心移り易く我慾の強い子供であつても其良心は活動的のものであるから、自分等が主を愛し又之に従ふに至る爲に説教者が盡して呉るのだと云ふ事を直に認めて居る。故に日曜學校の外部的牽引力がどれ程偉大であるとも、若し彼等が來て何物かを學ぶ事が出来ぬならば、特に聖書を學ぶ事が出来ぬならば、又其處にて神聖なる敬神の念を養ふ事が